

干潟下鶴遺跡 2

—福岡県小郡市干潟所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第254集

2011

小郡市教育委員会

序 文

小郡市は、北部における宅地開発や北東・中南部における工業団地の開発が相次いで行われ、現在福岡・久留米両市のベッドタウンとして日々発展を続けています。これに伴い、交通網の整備も着々と進捗しつつあります。

今回ここに報告する「干潟下鶴遺跡2」は、市道大保・今隈10号線道路整備事業に先だって、小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。遺跡は、花立山から延びる中位段丘上に築かれており、西側に隣接する干潟下鶴遺跡1と関連すると思われる古墳時代から近代にいたる人々の生活の痕跡が見つかっています。今回得られた成果が、小郡の歴史を復元する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成23年3月31日

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝

例 言

- 1、本書は平成22年度に行った市道大保・今隈10号線道路整備事業に伴い、小郡市教育委員会が小郡市干潟地内において発掘調査を行った干潟下鶴遺跡2の埋蔵文化財発掘調査の記録である。調査は小郡市教育委員会文化財課が小郡市道路建設課から委託を受けて実施した。
- 2、遺構の実測は杉本岳史・西江幸子・権丈和徳が実施し、遺構の写真撮影は西江が、空中写真は（有）空中写真企画が実施した。
- 3、遺物の復元・実測・製図には、西江のほかに白木千里、衛藤知嘉子、佐々木智子、原野照子、井上千代美、永倉さゆみ、長野智恵子、柳美保幸、権丈ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房に委託した。
- 4、出土人骨の現地での実測・取り上げ作業及び分析は、国立大学法人九州大学大学院比較社会文化研究院に依頼し、第5章の報告分を執筆いただいた。
- 5、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
- 6、本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準としている。
- 7、本書で用いる遺構略号は、SB：掘立柱建物、ST：土壇墓、SK：土壇、SD：溝、SJ：落とし穴状遺構、P：ピット、Z：攪乱である。
- 8、土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、口径の残存が1/6以下のもの、あるいは、口径の推定が困難なものである。
- 9、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
- 10、本書の執筆・編集は西江が担当した。

本文目次

第1章 調査の経過と組織	1
1. 調査の経緯	
2. 調査の経過	
3. 調査の体制	
第2章 位置と環境	2
第3章 遺跡の概要	5
第4章 遺構と遺物	5
1. 掘立柱建物	
2. 土壌墓	
3. 土壌	
4. 溝	
5. その他の遺構	
6. 調査区南側の地形変換点について	
第5章 干潟下鶴遺跡2出土人骨について	18
第6章 まとめ	19
1. 干潟下鶴遺跡2の遺構の時期とその変遷について	
2. 周辺地域における古墳時代後期から終末にかけての集落の広がりについて	

挿図目次

第1図 干潟下鶴遺跡2周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	2
第2図 干潟下鶴遺跡2調査地位置図 (S=1/500)	3
第3図 干潟下鶴遺跡2全体図 (S=1/150)	4
第4図 SB1実測図 (S=1/40)	6
第5図 SR1実測図 (S=1/20)	7
第6図 SK1・SK2・SK3・SK4実測図 (S=1/40)	9
第7図 SR1・SK1・SK2・SK4出土遺物実測図 (S=1/4、*5・6のみS=1/1)	10
第8図 SD1・SD2・SD3・SD4実測図 (S=1/40)	13
第9図 SJ1・斜面ピット群実測図 (S=1/40)	14
第10図 SK5・SD2・SD3・倒木痕出土遺物実測図 (17～20:S=1/8、21～25:S=1/4)	15
第11図 倒木痕土層実測図 (S=1/40)	17
第12図 調査区西壁面・調査区北壁面(東側)土層実測図 (S=1/40)	17

表目次

干潟下鶴遺跡2出土遺物観察表	20
----------------	----

図版目次

- 図版1 ①調査区全景（真上から）
②調査区より花立山をのぞむ（南側から）
③SB1全景（真上から）
- 図版2 ①SB1のP1土層断面（南側から）
②SB1のP2土層断面（南側から）
③SB1のP3土層断面（南側から）
④SB1のP4土層断面（南側から）
⑤SB1のP5土層断面（南側から）
⑥SR1土層断面（北側から）
⑦SR1人骨出土状況（南側から）
⑧SR1人骨出土状況UP（東側から）
- 図版3 ①SK1土層断面（南側から）
②SK2土層断面（南側から）
③SK3土層断面（東側から）
④SK4土層断面（東側から）
⑤SD1土層断面（西側から）
⑥SD1完掘全景（西側から）
⑦SD3西側土層断面（西側から）
- 図版4 ①SD3完掘全景（西側から）
②SD4北側土層断面（北側から）
③SD4完掘全景（南側から）
④SJ1土層断面（西側から）
⑤SJ1ピット完掘全景（西側から）
⑥倒木痕土層断面北側（西側から）
⑦倒木痕土層断面南側（西側から）
- 図版5 SR1・SK1・SK4出土遺物
- 図版6 SK4・SK5・SD3・倒木痕出土遺物

第1章 調査の経過と組織

1. 調査の経緯

干潟下鶴遺跡2の発掘調査は、小郡市干潟字下鶴 2148-11、2129-3 が「市道大保・今隈 10 号線」道路改良工事の対象地となったことから、平成 21 年 4 月 9 日小郡市役所道路建設課より埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号 9003）が提出されたことに始まる。隣接地ではこれまで、平成 17 年度に「市道大保・今隈 10 号線」道路改良工事に伴う発掘調査（干潟下鶴遺跡1）が実施されており、当地に関しても遺跡が存在することは明白であったため、開発に先立って協議が必要である旨の回答を行った。

その後両者で協議を行った結果、平成 22 年度事業として調査及び発掘調査報告書を刊行する事で同意を得た。調査費用に関しては、小郡市役所道路建設課より小郡市教育委員会文化財課が予算の執行委任を受けた。

2. 調査の経過

発掘調査は平成 22 年 7 月 14 日から同年 8 月 27 日にかけて実施した。現地調査期間は、連日猛暑に見舞われ、例年になく厳しい天候の中での作業となった。調査の主な経過は以下のとおりである。

- 7 月 15 日 調査地内に植えられていた竹林の伐採開始。
- 7 月 20 日 発掘道具の搬入。
- 7 月 22 日 調査対象地の仮囲いを設置。重機による表土剥ぎ開始。
- 7 月 26 日 発掘作業員を投入し、遺構掘削開始。
- 8 月 5 日 人骨の取り上げ（～6 日）。
- 8 月 13 日 お盆のため現場作業を一時中断。
- 8 月 16 日 作業再開。
- 8 月 20 日 調査区全景写真撮影。
- 8 月 26 日 遺構実測終了。
- 8 月 27 日 調査完了、道路建設課担当者立会いのもと現地引き渡し。

3. 調査の体制

〔小郡市役所都市建設部〕

部 長 池田 清巳
道路建設課 課 長 佐藤 吉生
道路建設係 係 長 松井 秀章
山口 浩一

〔小郡市教育委員会〕

教 育 長 清武 輝
教育部長 河原 寿一郎
文化財課 課 長 田籠千代太
係 長 片岡 宏二
技 師 杉本 岳史
技 師 西江 幸子

〔発掘作業従事者〕

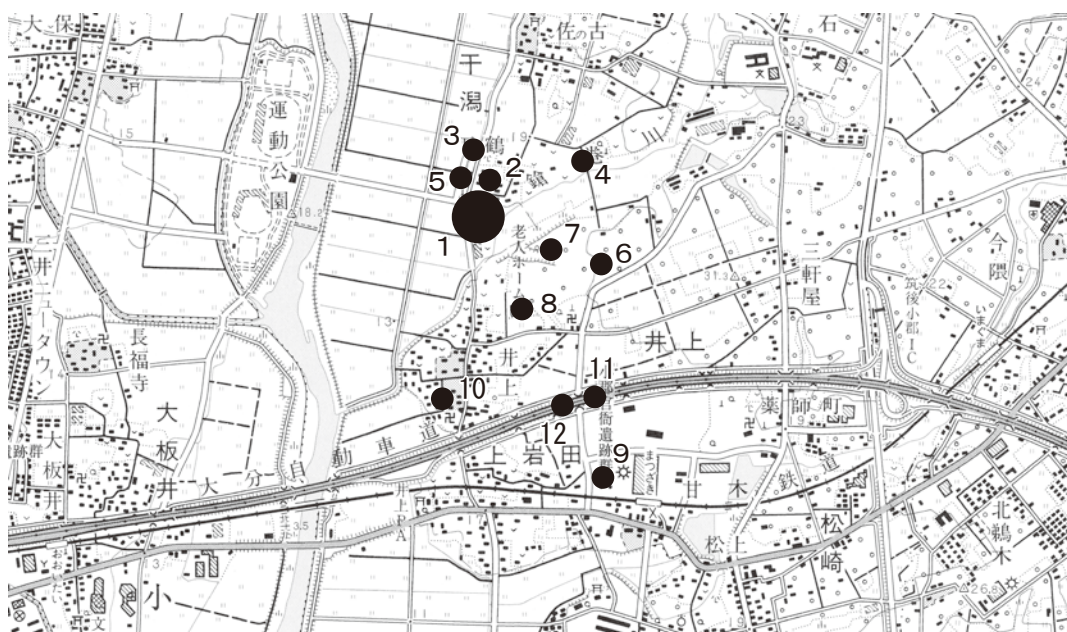
権丈和徳（別府大学学生）、草場誠子、土井久江、野田博文、松田徳代（以上小郡市在住）（敬称略）

第2章 位置と環境

遺跡は、小郡市干潟字下鶴 2148-11、2129-3 に位置する。隣接する干潟下鶴遺跡1に続き、今回は第2次調査である。

小郡市は市の中央部を南北に宝満川が流れ、その右岸の北西部には通称三国丘陵と呼ばれる低位段丘が、その左岸の北東部には花立山（標高 130.6 m）から延びる丘陵が、そして南側には平坦地が広がる。宝満川を挟んで左右に立地するこれらの丘陵は、北から南へいくにしたがって緩やかに下る平坦な台地へ移行し、筑後平野へと連なる。干潟下鶴遺跡2は、左岸の花立山から南西方向に舌状に延びる丘陵の縁端部に位置する。干潟下鶴遺跡2の南側には宝満川の支流である鎗巻川が北東から南西に向かって流れており、調査区はこの河川により扇状地が開析された段丘崖となっている。同様に鎗巻川を挟んで南側に位置する井上小松山遺跡3・4（市報第 227 集）でも鎗巻川によって開析された段丘崖が確認されている。小郡市においては三国丘陵でみられるように、このような谷地形は弥生時代前期から湧水を利用した水田として使用される例が多いものの、下鶴区と井上区ではいまだ水田に関する確認事例は未報告である。

花立山から筑後平野に向かって延びる広い裾野には、洪積層からなる標高 20 m 程度の台地が広がっており、旧石器時代から現代に至るまで生活の場として利用されてきた。特に、鎗巻川を挟んで北側の舌状丘陵では、干潟下鶴遺跡1（1）、下鶴古墳（2）、吹上二ツ塚遺跡2（3）、干潟東畑遺跡（4）等の古墳時代以降を中心とした遺跡が確認されている。箱式石棺を主体部を持つ古墳時代前期の下鶴古墳は、大正時代に発見・発掘されており、人骨と共に四獣鏡1面や鉄刀、鉄鏃、鉄斧が副葬されていた。下鶴古墳から西に約 75 m の所にある吹上二ツ塚遺跡2では、下鶴古墳と同時代の二重口縁壺が出土しており、また、第二次世界大戦時に使用されたと思われる防空壕が確認された（市報第 228 集）。干潟下鶴遺跡1では、古墳時代後期の掘立柱建物、近世の溝等が確認された（市報第 231 集）。干潟東畑遺跡では、これまで花立山周辺でしか報告されてきていなかった古代の集落が確認された（市



1. 干潟下鶴遺跡1・2 2. 下鶴古墳 3. 吹上二ツ塚遺跡2 4. 干潟東畑遺跡
5. 干潟二ツ塚遺跡1 6. 井上小松山遺跡1・2 7. 井上小松山遺跡3・4
8. 井上北内原遺跡、井上南内原遺跡1・2・3 9. 上岩田遺跡 10. 井上廃寺
11. 薬師堂東遺跡 12. 井上薬師堂遺跡

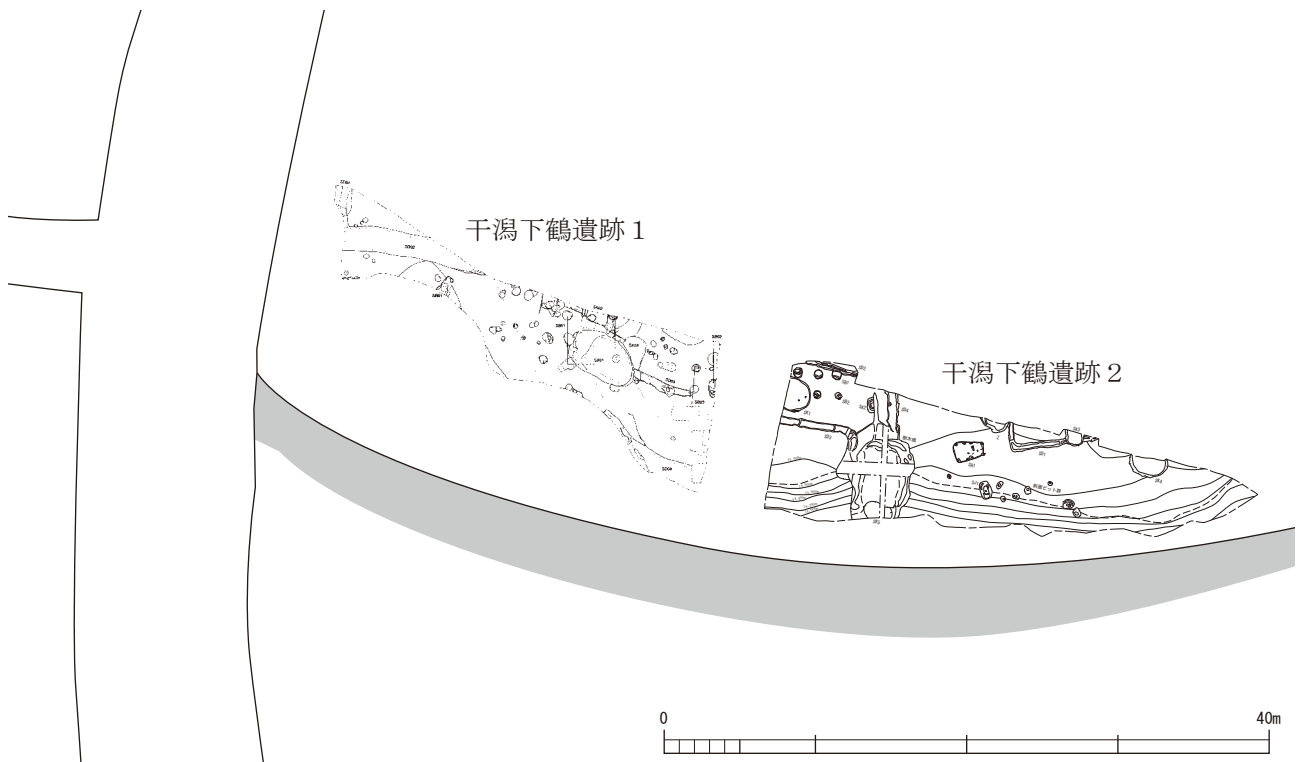
第1図 干潟下鶴遺跡2周辺遺跡分布図 (S = 1 / 25,000)

報第 258 集)。また、干潟二ツ塚遺跡1では、落とし穴状遺構や土壌が検出されているが時期は不明である(5:市報第 195 集)。

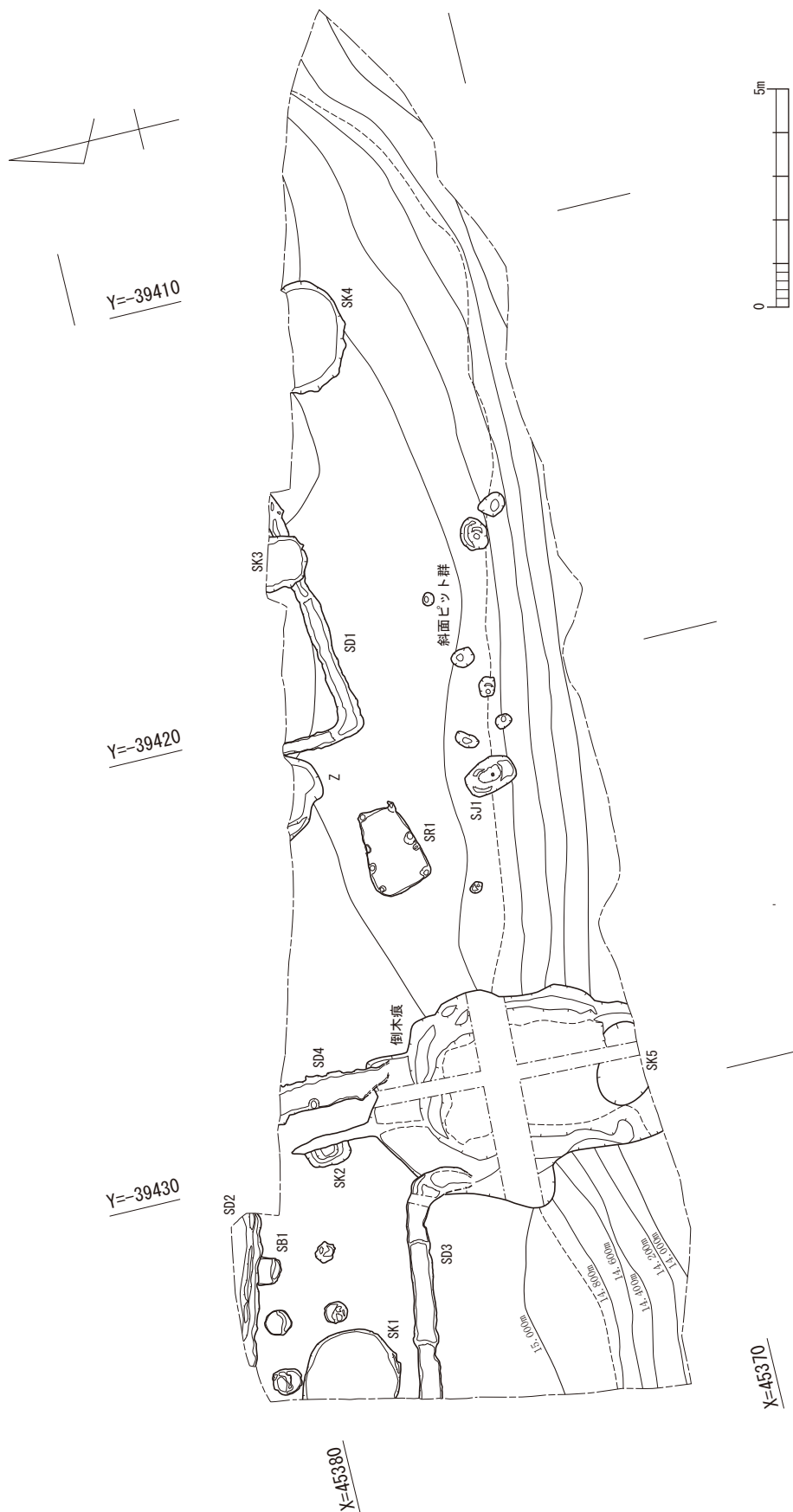
一方、鎗巻川を挟んで南側の舌状丘陵では、井上小松山遺跡1・2(6)、同3・4(7)、井上北内原遺跡(8)、井上南内原遺跡1(8)、同2(8)、同3(8)等、縄文時代以降を中心とした遺跡が確認されている。井上小松山遺跡の第1次・第2次調査では、縄文時代の落とし穴状遺構が検出されており、当時の狩猟場と考えられている(市報第 191 集)。井上小松山遺跡の第3次・第4次調査では、弥生時代の竪穴住居や祭祀土壌、古墳時代前期の住居跡や同後期の掘立柱建物等が確認された(市報第 227 集)。井上北内原遺跡は、弥生時代と古代の複合遺跡で、中心は遺跡の南側に広がる住居跡と北側に広がる甕棺墓、また祭祀土壌等である(市報第 20 集)。井上北内原遺跡のすぐ南側には、井上南内原遺跡が広がっており、これまでに3回調査が行われている。第1次調査では、奈良時代の掘立柱建物や住居跡などが検出され、遺構からは井上廃寺と関連が考えられる瓦類が多数出土した(市報第 112 集)。その後、弥生時代中期～古墳時代後期の掘立柱建物や竪穴住居が第2次調査で(市報告第 186 集)、古墳時代終末を中心とするカマドを備えた竪穴住居などが第3次調査で検出された(市報告第 244 集)ことにより、井上南内原遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡であることが確認された。

これらの遺跡より南東へ約 420m の所には、この地域の歴史を語る上で欠かすことのできない上岩田遺跡(9)、井上廃寺(10:市報第 122 集)、薬師堂東遺跡(11:県横断道 13)や井上薬師堂遺跡(12:県横断道 38)等公的性格を持つ7・8世紀の遺跡が確認されている。特に、上岩田遺跡では、7世紀後半以降が中心の基壇上の瓦葺き金堂と官衙的様相を持つ大型掘立柱建物が検出された。

鎗巻川北側の舌状丘陵において、古代との関連を持つ遺跡は干潟東畑遺跡のみであり、これまで花立山周辺でしか確認されていなかった。しかし、今回確認された古墳時代終末の集落は、古墳時代終末から古代へのこの地域の発展過程を考える上で必要不可欠な成果である。今後の調査事例を踏まえ、この地域の発展過程について詳細に検討する必要がある。



第2図 干潟下鶴遺跡2調査地位置図 (S = 1 / 500)



第3図 干潟下鶴遺跡2全体図 (S= 1 / 150)

第3章 遺跡の概要

干潟下鶴遺跡2は、花立山から南西方向へ延びる丘陵上に位置し、標高 15.75 m前後、遺構検出面で 14.90 m前後を測る。表層は造成土により構成され、その下層に黒ボク土が堆積し、その下層に遺構検出面である淡い茶褐色ローム層や黄褐色土・淡黄白色の砂の地山面が堆積している。多くの遺構は地山面より掘り込まれていたが、SD1・SD3・SD4のみ黒ボク土から遺構が掘り込まれていた。この黒ボク土は、この地域の鍵層とされており、特に調査区内では北側や東側への堆積が目立つ。

干潟下鶴遺跡2で検出した主な遺構・遺物は以下のとおりである。

掘立柱建物は、調査区北西部において検出された。一定間隔を置いた規則的な配置で2列の柱穴列を確認できる。隣接する干潟下鶴遺跡1の北東側隅において検出された掘立柱建物と同時期のものではないかと考えられる。また、長方形の土壙墓からは、人骨とともに江戸時代の貨幣や近現代の磁器類などが出土している。土層の堆積状況より攪乱を受けたと考えられ、攪乱部分の堆積層からは近現代の磁器類が出土している。

井上小松山遺跡3・4でみられた低位段丘の落ち込みは、干潟下鶴遺跡2の南側から東側にかけてもみられた。このことから、現地地形同様に旧地形においても、井上小松山遺跡3・4が位置する段丘と干潟下鶴遺跡2が位置する段丘の間には、鎗巻川を中心に谷が広がっていたと考えられる。

今回検出された遺構の内、倒木痕より北西側に位置するSB1及びSD3の遺構は、いずれも干潟下鶴遺跡1で調査されたものと関連性が高いことから、同一の集落に属するものと考えて問題ないと考えられる。

●遺構

・掘立柱建物 (SB)	1棟
・土壙墓 (SR)	1基
・土壙 (SK)	5基
・溝 (SD)	4条
・落とし穴状遺構 (SJ)	1基
・斜面ピット群 (P)	
・倒木痕	1基

●遺物

・須恵器
・土師器
・陶磁器
・貨幣

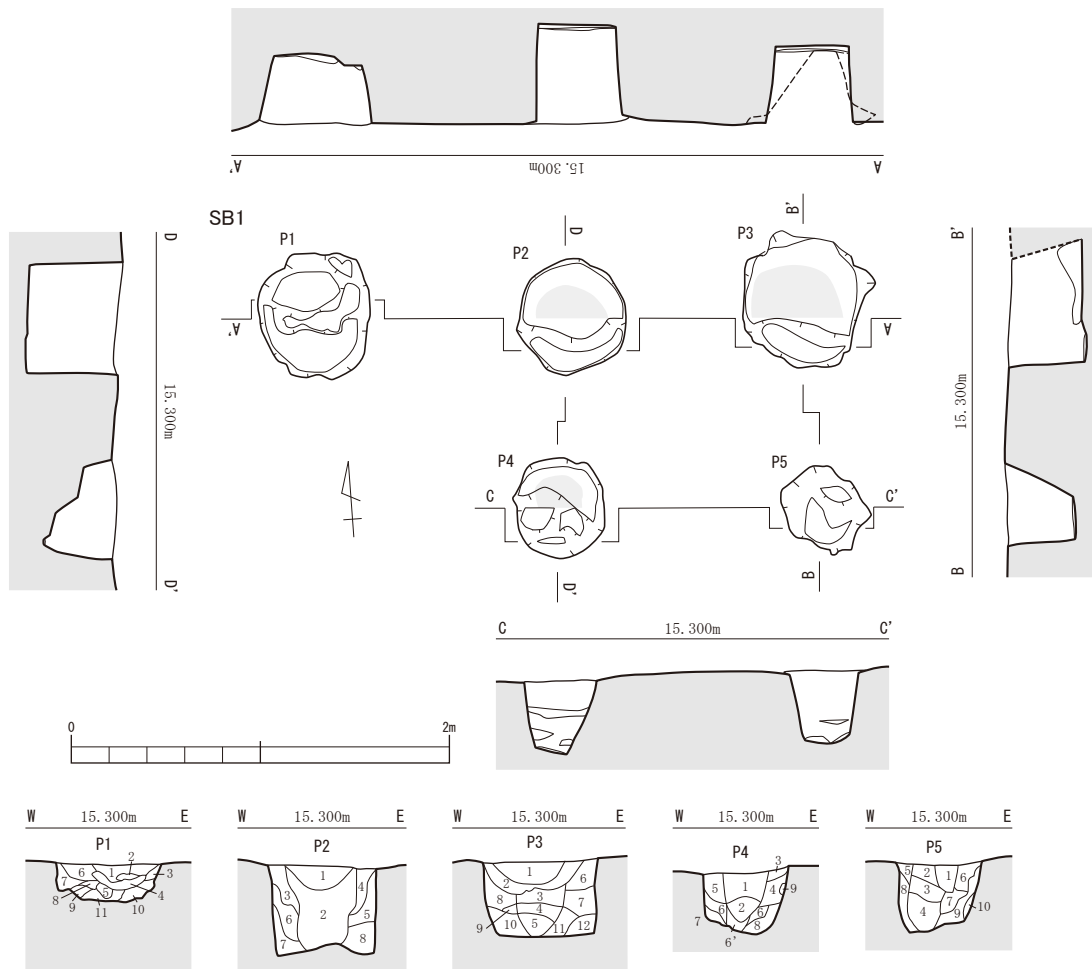
第4章 遺構と遺物

1. 掘立柱建物 【SB】

SB-1 (第4図、図版1・2)

調査区西端に位置し、北・西へ延長すると考えられるが、建物全体の規模は不明である。柱穴の列はP1・P2・P3の列とP4・P5の列の2列を確認し、P3はSD2に一部を切られている。P1・P2・P3の列は、柱間約 120 cm～135 cm、柱穴は直径 60 cm～65 cm、深さ 20 cm～50 cmを測るが、P4・P5の列は柱間 140 cm、柱穴は直径約 50 cm、深さ約 38 cmとやや小型である。平面形は全て円形を呈すが、P1・P2・P3の列は壁面がほぼ直立するのに対し、P4・P5の列は壁面が外傾気味に立ち上がる。埋土は、P1・P2・P3の列で灰褐色シルトを主体とするのに対し、P4・P5の列では褐色シルトを主体とする。柱穴の大きさや形状、埋土の色で差異がみられるものの、双方の列ともに柱穴の配列が等間隔に平行で対応していることから、柱穴が小型なP4・P5の列を建物の外周柱穴列とする掘立柱建物である可能性が考えられる。

P2から土師器の甕の口縁部、P5から微細な土師器片が出土しているが、細片のため図示するにいたらなかった。



- P1
- 1 淡褐色と褐色の混在 (しまりあり、バサバサしている、シルト)
 - 2 黄褐色 (しまりあり、バサバサしている、シルト、[地山])
 - 3 黒褐色 (しまりあり、やや粘質、シルト)
 - 4 明茶褐色 (しまりあり、バサバサしている、シルト)
 - 5 黄褐色 (しまりあり、バサバサしている、シルト、[地山])
 - 6 淡褐色 (しまりあり、やや粘質、シルト、8に比べ礫多い)
 - 7 灰褐色 (しまりあり、やや粘質、シルト)
 - 8 淡褐色 (しまりあり、やや粘質、シルト、6に比べ礫がなく細砂のみ)
 - 9 淡灰褐色 (しまりあり、やや粘質、シルト)
 - 10 暗褐色 (黄褐色のブロック混じる、しまりあり、やや粘質、シルト)
 - 11 灰褐色 (しまりあり、やや粘質、シルト)

- P2
- 1 灰褐色 (しまりあり、バサバサしている、やや粘質)
 - 2 暗灰褐色 (しまりあり、バサバサしている、やや粘質)
 - 3 褐色 (しまりあり、バサバサしている、1mmの黄褐色のブロックが少し混じる)
 - 4 褐色 (しまりあり、バサバサしている、やや粘質)
 - 5 褐色 (しまりあり、バサバサしている、3cm×1cmの黄褐色のブロックが混じる、暗茶褐色も混じる)
 - 6 灰褐色 (しまりあり、バサバサしている)
 - 7 灰褐色 (しまりあり、バサバサしている)
 - 8 灰褐色 (しまりあり、バサバサしている)

- P3
- 1 淡褐色 (中央に暗灰褐色、しまりあり、1mm台の小石を少し含む)
 - 2 褐色 (しまりあり、1mm台の小石を少し含む)
 - 3 暗褐色 (しまりあり、やや粘質)
 - 4 淡褐色 (黄褐色のブロック混じる、しまりあり、やや粘質)
 - 5 暗褐色 (しまりあり、やや粘質)
 - 6 淡灰褐色 (しまりあり、やや粘質、7と類似するが7より土色が薄い)
 - 7 灰褐色 (しまりあり、やや粘質、1mm台)
 - 8 淡灰褐色 (しまりあり、やや粘質、1mm台)
 - 9 暗褐色 (しまりあり、やや粘質)
 - 10 淡褐色 (しまりあり、やや粘質)
 - 11 淡褐色 (しまりあり、やや粘質)
 - 12 暗褐色 (しまりあり、やや粘質)

- P4
- 1 暗灰褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む)
 - 2 暗褐色 (しまりあり、バサバサしている、黄褐色の地山のブロック含む)
 - 3 褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む)
 - 4 暗灰褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む)
 - 5 暗灰褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む)
 - 6 灰褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む)
 - 6' 6と同じ
 - 7 暗灰褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む)
 - 8 黄褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む、褐色混じる)
 - 9 黄褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂を含む)

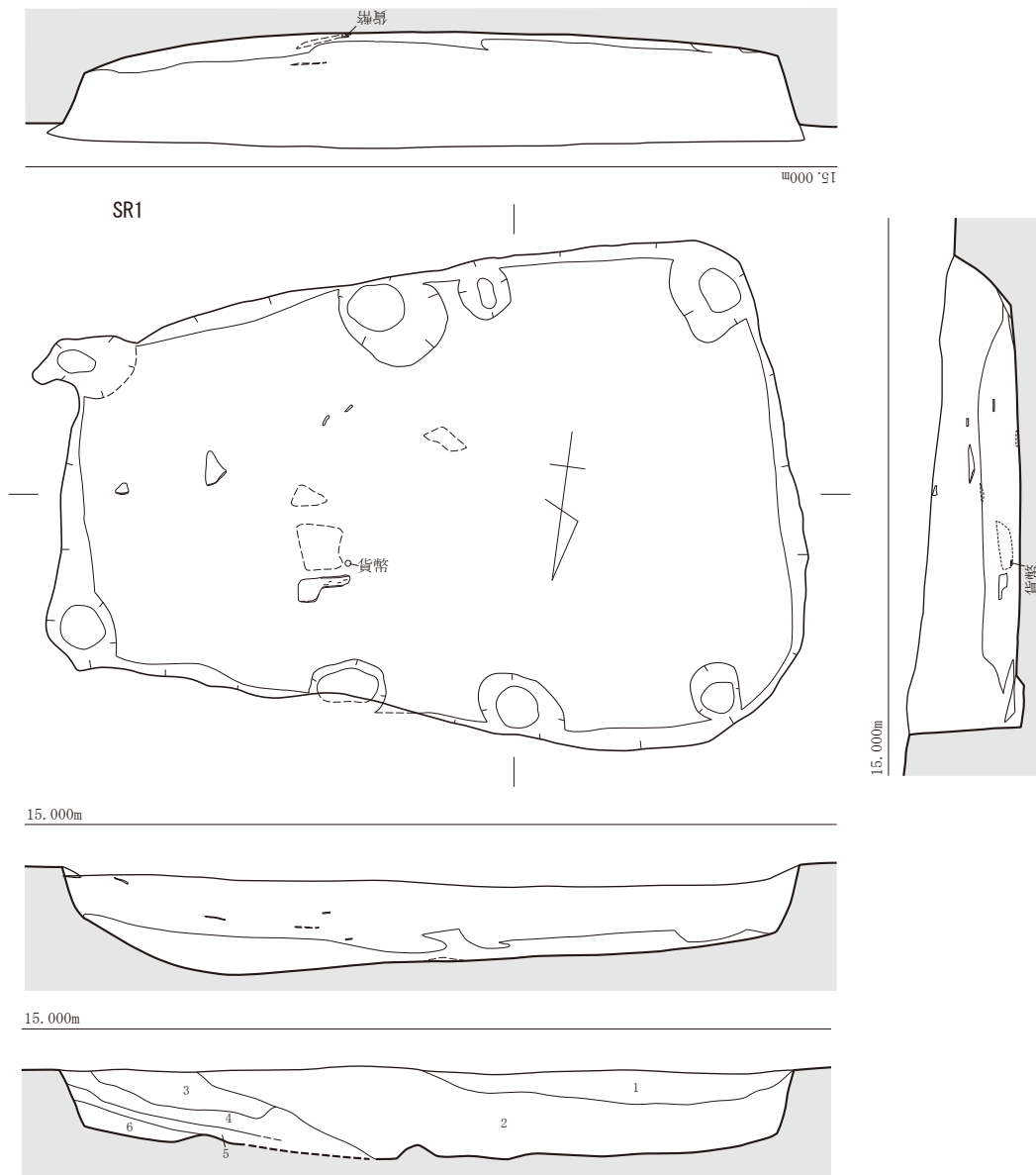
- P5
- 1 黄褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)
 - 2 褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)
 - 3 暗茶褐色 (しまりあり、バサバサしている、やや大きめの細砂含む)
 - 4 暗褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)
 - 5 淡褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)
 - 6 暗茶褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)
 - 7 褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)
 - 8 黄褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む、灰褐色混じる)
 - 9 暗茶褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)
 - 10 茶褐色 (しまりあり、バサバサしている、細砂含む)

第4図 SB1実測図 (S=1/40)

2. 土壙墓 【SR】

SR-1 (第5図、図版2)

調査区中央部において検出した土壙墓である。平面形は197 cm×128 cmの隅丸長方形を呈し、深さは約26 cmと浅い。埋土は土質より2層に区分でき、ぱさぱさした埋土の1～4層と非常に固くしまった5層・6層からなっている。骨は3層以下において検出している。骨片に関しては散在していた場所を破線で囲み、その範囲を示している。貨幣は床面近くより出土した。一方で、近現代の磁器が2層よりまとまって出土している。埋土の堆積状況と遺物の出土状況より、攪乱を受けたと考えられる。



- SR1
- 1 灰褐色 (1cm×1cm位の黄褐色のブロックが混じる、シルト、バサバサしている)
 - 2 黒褐色 (2cm×3cm位の黄褐色のブロックが混じる、バサバサしている)
 - 3 明灰褐色 (シルト、バサバサしている)
 - 4 明茶褐色 (シルト、ややバサバサしている)
 - 5 暗灰褐色 (シルト、ややバサバサしている)
 - 6 淡茶褐色 (0.5cm×2cm位の茶系の黄色のブロックが混じる、バサバサしている、しまりあり、固い)

第5図 SR1実測図 (S=1 / 20)

出土遺物（第7図、図版5）

1～4は磁器であり、このうち1・2は埋土2層の中位よりまとまって出土した。1は盃であり、外面には文字が書かれているが判読はできなかった。2は型押し皿であり、口縁部が花卉状に湾曲し、銅版転写による染付が内外面になされている。3は皿であり、銅版転写による染付が外面になされ、畳付けは釉削りがなされている。4は碗であり、銅版転写による染付が外面に施され、内面は輪状の釉ハギがなされている。畳付けも釉削りがなされており、高台は山形に削りだされている。5・6は貨幣である。5は、2層最下層の床面直上より出土した。表面に字が打たれているが、「●永通●」までしか判読はできなかった。6は、人骨近くの床面直上より出土した。側面の欠損が激しく、表裏面の磨滅も激しいものの、直径や厚さ、規格より昭和21年改正錫貨の五銭錫貨である可能性が高いと考えられる。

この他にも磁器の小片が数点出土しているが、5を除いて19世紀末以降の遺物が中心である。

3. 土壌【SK】

SK-1（第6図、図版3）

調査区北西部の西壁際にて検出した土壌であり、一部は調査区外に及ぶ。平面形は220 cm×159 cmの楕円形を呈し、深さは約30 cmと浅い。床面は硬いことから、人が意図して踏み固めたうえに埋土がのったと考えられる。陶器の碗が2層と4層の境から、その他土師器片や須恵器片が3層以下から出土していることから、2層以上は攪乱後に堆積したと考えられる。

出土遺物（第7図、図版5）

遺構埋土中より、7～9が出土した。7は土師器の甕である。口径23.6 cmで、口縁部がやや外反気味に立ち上がった後、端部を緩くつまんでいる。7以外にも同様の甕が2点出土しているが、小片のため図示するにいたらなかった。8は須恵器の坏身である。9は陶器の碗である。高台より緩やかなカーブを描きながら体部が形成されており、外面には釉薬が施され、畳付けは釉削りがなされている。7・8は古墳時代終末、9は江戸時代のもと考えられる。

SK-2（第6図、図版3）

調査区北西部にて検出した土壌であり、倒木痕の根に一部を切られている。平面形は103 cm×43 cmの楕円形を呈し、深さは約40 cmである。遺物はほとんど出土していないが、土師器片1点のみ図化するにいたった。

出土遺物（第7図）

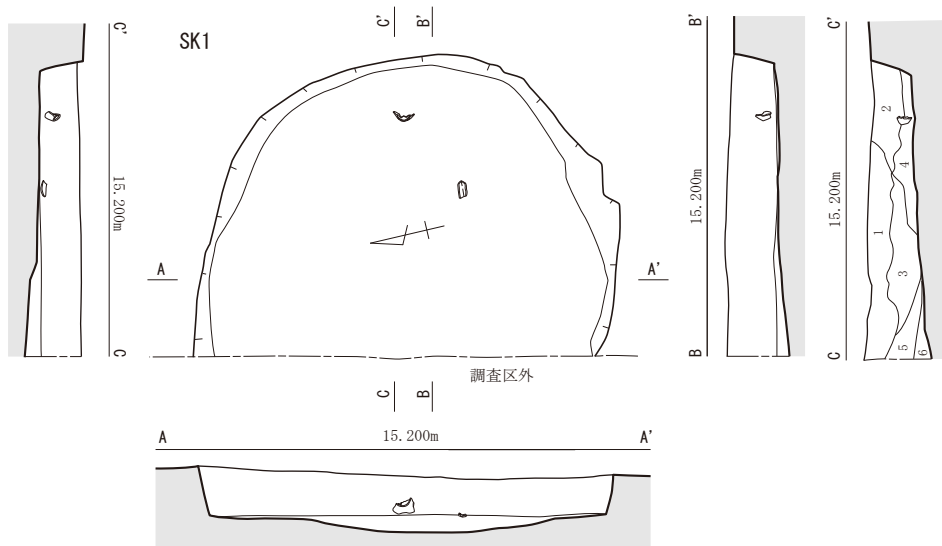
10は土師器の甕である。小片のため口径は不明だが、口縁部がやや外反気味に立ち上がる。形態より古墳時代終末のもと考えられる。

SK-3（第6図、図版3）

調査区北東部の北壁際にて検出した土壌であり、一部は調査区外に及び、SD1を切っている。平面形は97 cm×120 cmの楕円形を呈し、深さは約30 cmと浅い。遺物は瓦質土器の播鉢片1点が出土したのみであるが、図化するにはいたらなかった。

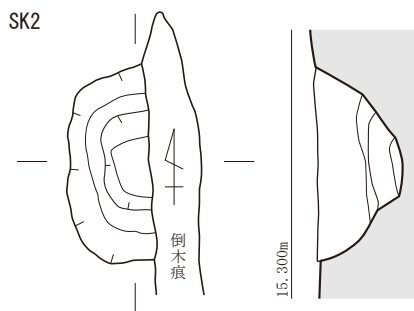
SK-4（第6図、図版3）

調査区北東部の北壁際にて検出した土壌であり、一部は調査区外に及ぶ。平面形は255 cm×128 cmの楕円形を呈し、深さは約75 cmである。床面は硬いことから、人が意図して踏み固めた上に埋土がのったと考えられる。遺物は遺構の中位より多量に出土したが、ほとんどが小片であり図化するにいたったものは少ない。



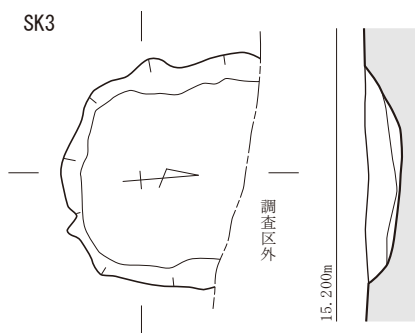
SK1

- 1 明褐色 (粘質、バサバサしている、細砂を多く含む)
- 2 黒褐色 (粘質、しまりあり、細砂を少し含む[土器片は2層で刺さっている])
- 3 褐色 (粘質、しまりあり、細砂を含む、1cm台の橙色のブロックが混じる)
- 4 茶褐色 (粘質、しまりあり、3cm台の黄褐色[地山と同じ]のブロックが床直上でみられる)
- 5 茶褐色 (粘質、しまりあり)
- 6 暗褐色 (1.5cm台の黄褐色[地山と同じ]のブロック混じる、粘質、しまりあり)



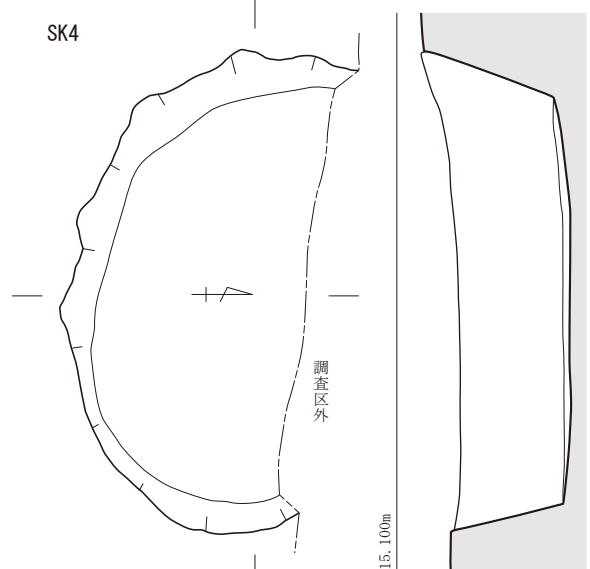
SK2

- 1 灰褐色 (黄褐色の小さいブロック混じる、細砂粒混じる、しまりあり、やや粘質)
- 2 暗褐色 (黄褐色のブロック混じる、細砂粒混じる、しまりあり、やや粘質)
- 3 暗灰褐色 (黄橙褐色のブロック混じる、細砂粒少量混じる、しまりあり、やや粘質)



SK3

- 1 淡茶褐色 (シルト、バサバサしている)
- 2 灰褐色 (1mm台の小石混じる、バサバサしている)
- 3 淡褐色 (灰褐色のブロック混じる、シルト、しまりあり)
- 4 黒褐色 (シルト、バサバサしている、緻密)

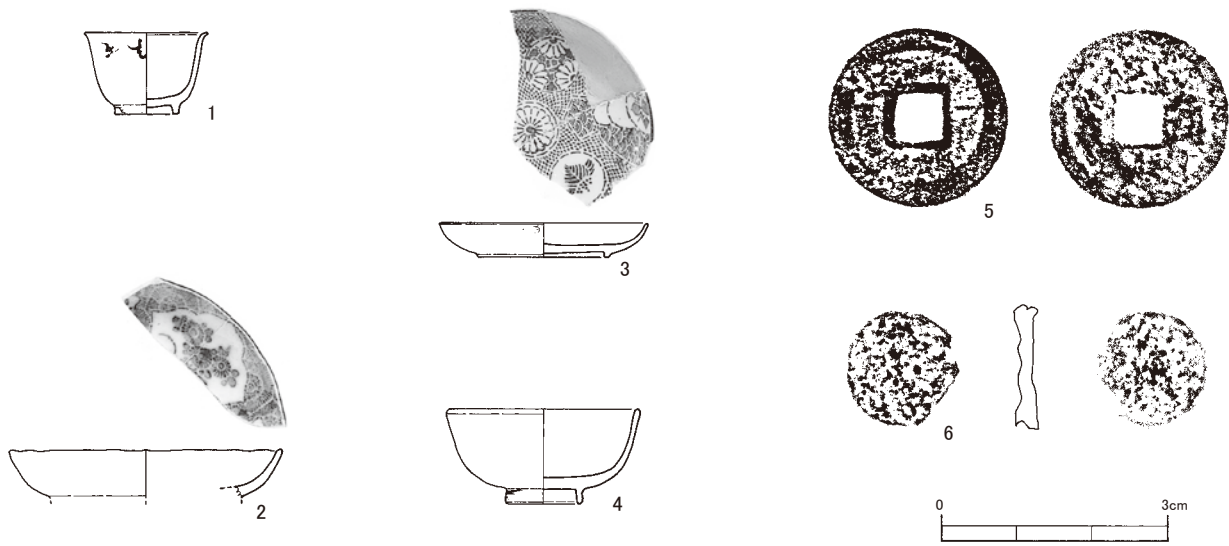


SK4

- 1 暗褐色 (やや粘質、しまりあり、細砂を少し含む)
- 2 暗褐色 (1に比べ土色は薄い、やや粘質、しまりあり、細砂を少し含む)
- 3 灰褐色 (やや粘質、しまりあり、黄褐色のブロック混じる、1mm台の砂をやや多く含む)
- 4 黄褐色に灰褐色混じる (やや粘質、しまりあり、[地山の流れ込みか])
- 5 暗茶褐色 (粘質、しまりあり、1mm台の砂をやや多く含む、遺物を含む)
- 6 茶褐色 (粘質、しまりあり、細砂を少し含む)
- 7 黒褐色 (粘質、しまりあり、細砂を極わずかに含む)



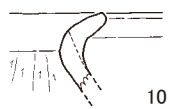
第6図 SK1・SK2・SK3・SK4実測図 (S=1/40)



SR1

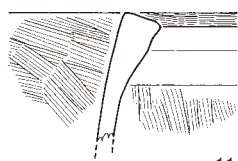


SK1
SK4

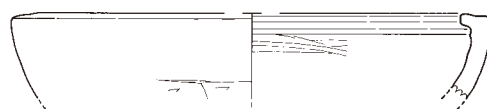


10

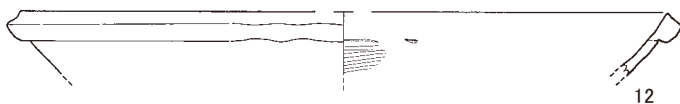
SK2



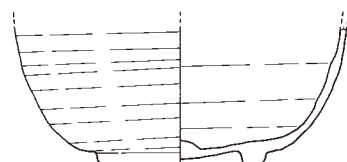
11



14



12



15



13



16



第7図 SR1・SK1・SK2・SK4出土遺物実測図 (S=1/4、*5・6のみS=1/1)

出土遺物（第7図、図版5・6）

11は瓦質土器の鍋である。内外面ともに丁寧なハケメ調整を施している。12・13は土師器の鍋である。12は口縁端部が外側へ台形状に拡張するが、13はやや丸みを持って外側に拡張する。12・13ともに、内外面ともにハケメ調整が施されている。14は瓦質土器の鉢である。口縁端部が内側にL字状に屈曲している。外面は口縁部付近にススが付着し、胴部にかけては横方向のヘラ削りが施されている。内面はハケメが施されている。15は陶器の碗である。内面は粗雑な回転ナデが施されており、外面は薄く釉が施されている。畳付けから高台にかけて釉削りがなされている。16は染付の皿である。内面は見込み中央部に五弁花文が描かれ、その外側に輪状の釉ハギがなされ、胴部に染付が施されている。畳付けは釉削りがなされている。11～14は16世紀、15・16は17世紀・18世紀のものと考えられる。

SK-5（第11図）

調査区南西部の南壁際にて検出した倒木痕を切っている土壌であり、一部は調査区外に及ぶ。平面形は190 cm×125 cmの楕円形を呈する。遺構検出面より約40 cm掘り下げた時点で水が湧きだした。SK5は斜面の最下部にて検出した遺構であり、現地表面より175 cm下において遺構面を検出していることから、遺物のみの取り上げに終始した。遺物は遺構検出面より陶器の水甕（17）が上向きで出土し、その下からは土師器や陶器の甕が出土し、特に19は、17同様に上向きで出土している。

出土遺物（第10図、図版6）

17は肥前陶器の甕である。口径46.6 cm、口縁部は内側が玉縁状に拡張してあり、頸部の外面には、回転削りで幅広の沈線を1条刻みこんでいる。内面に格子目文叩きを施している。18は磁器の甕である。底径13.4 cm、外面に釉葉が施されている。19・20は土師質の大甕である。内面に横方向のハケメを施し、粘土接合痕が器壁において看守できるほど粗い成形がなされている。17～20はいずれも便槽として使用されたものと考えられる。

4. 溝【SD】

SD-1（第8図、図版3）

調査区の北壁際において検出したL字状に屈曲する溝であり、SK3に一部を切られている。現状で全長約6.7 mを測る。遺構は、調査区北壁から南方向に約90 cm延びたところで西方向に屈曲し、西方向に約5.8 m延びたところで北壁にぶつかる。南北方向で幅は26 cm、深さ5 cm～11.5 cm、東西方向で幅24 cm、深さ約25 cmを測り、断面形状はU字型に近い逆台形を呈する。埋土は基本的にはレンズ状堆積で、人為的埋め戻しはみられない。調査区北壁の土層より、黒ボク層から遺構の掘り込みラインがみられたことから、本来は現在より深い溝と考えられる。

遺物は須恵器の胴部片1点を検出したのみであるが、小片のため図化にはいたらなかった。

SD-2（第8図）

調査区北東部の北壁際において検出した東西方向に延びる溝であり、SB1のP3を一部切る。現状で全長約3.5 mを測る。遺構は溝の片側の立ち上がり部分を検出したのみであり、もう一方の立ち上がり部分は調査区外へと延びる。

遺物は土師器の小片が数点出土したのみであり、図化するには至らなかったが、床面直上より出土した須恵器の坏蓋1点のみ図化することができた。

出土遺物（第10図）

21は須恵器の坏蓋である。小片のため基部径は不明であるが、受け口に向かって器壁が薄くなり、回転ヘラ削りが施された部分を中心にやや強く屈曲する。つまみがつく蓋と想定され、7世紀後半のものと考えられる。

SD-3 (第8図、図版3・4)

調査区の西壁際において検出したL字状に屈曲する溝であり、倒木痕の一部を切っている。現状で全長約 6.2 mを測る。遺構は、調査区西壁から東方向に約5m延びたところで南方向に屈曲し、南方向に約 1.2m 延びたところで倒木痕との切り合いを確認し損ない、遺構の立ち上がりを検出できなかった。幅は約 60 cm、深さは約 10 cmと浅いが、調査区西壁の土層より、黒ボク層から遺構の掘り込みラインがみられたことから、本来は現在より深い溝と考えられる。断面形状は、逆台形を呈する。埋土は基本的にはレンズ状堆積で、人為的な埋め戻しはみられない。

遺物は遺構検出面直上より磁器碗が出土したのみである。

出土遺物 (第 10 図、図版6)

22 は磁器の碗である。外面には釉が施されており、内面は輪状の釉ハギがなされ、畳付けから高台にかけて粗く釉削りがなされている。

SD-4 (第8図、図版4)

調査区の北壁際から南方向に延びる溝であり、倒木痕の一部を切っている。現状で全長約 2.6 mを測るが、南方向への遺構の立ち上がりは倒木痕との切り合いを確認し損ない検出できなかった。幅は 70 cm、深さは 10 cmと浅いが、調査区北壁の土層より、黒ボク層から遺構の掘り込みラインがみられたことから、本来は現在より深い溝と考えられる。断面形状は、逆台形を呈する。埋土は基本的にはレンズ状堆積で、人為的な埋め戻しはみられない。

遺物は土器の小片が1点出土したのみであるが、図化するにはいたらなかった。

5. その他の遺構

【SJ-1】落とし穴状遺構 (第9図、図版4)

調査区の中央部斜面際において検出した。上面の平面形は検出面で 120 cm × 73 cmの楕円形、底面の平面形は 54 cm × 32 cmの楕円形、深さは 100 cmある。底面付近は8層・9層と攪乱を受けていたが、その下より、杭痕とみられる6cm × 7cmの楕円形のピットを1つ検出した。

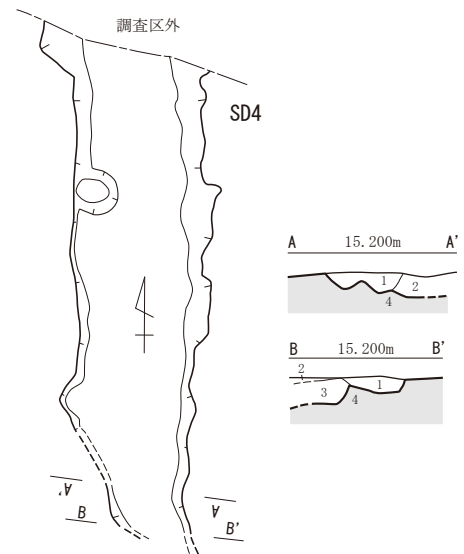
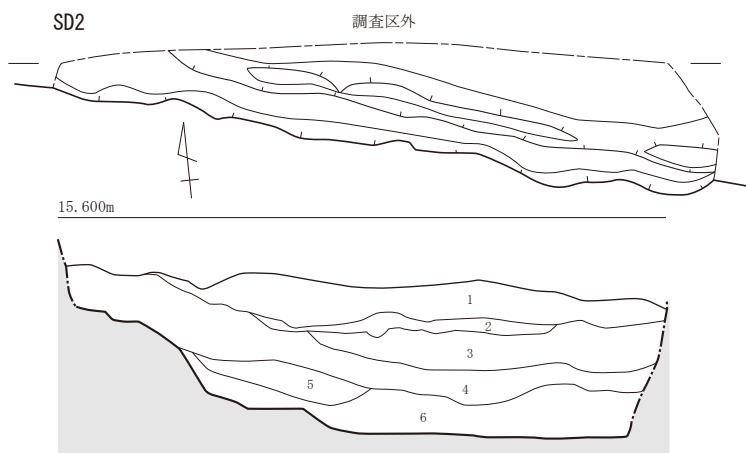
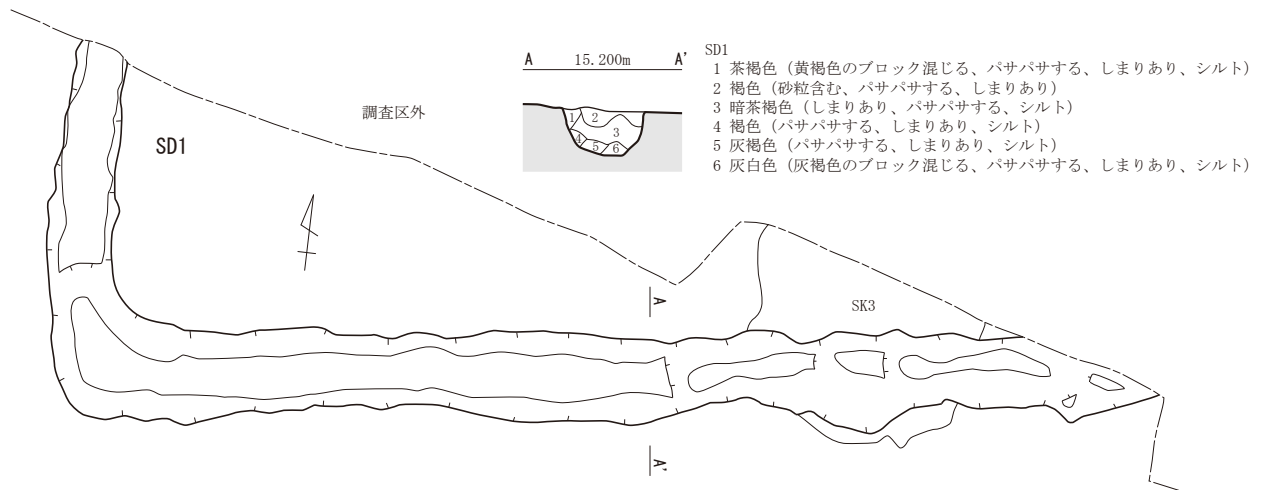
遺物は土師器片が数点出土したのみであるが、小片のため図化するにはいたらなかった。

【P】斜面ピット群 (第9図)

調査区中央部の斜面上側において、7基のピットを確認した。ピットの埋土は黒褐色や灰褐色を基調としている。遺物はP7・P8・P9・P11・P12より土師器の小片が少し出土したのみであり、図化するにはいたらなかった。これらのピットが平坦面から斜面へと下る地点にほぼ東西方向に向かって散在していることから、斜面と平坦面とを区分する柵の可能性が推定されるが、杭痕などは検出できなかった。

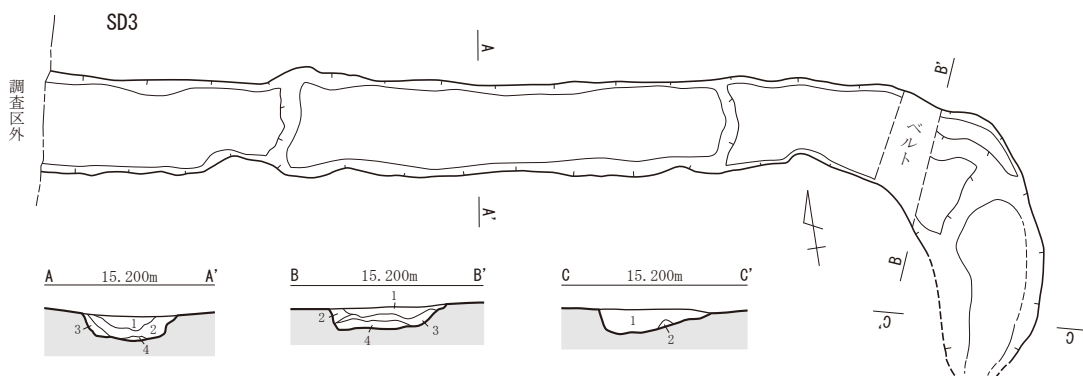
倒木痕 (第 11 図、図版4)

調査区西側の平坦面から斜面部分にかけて位置する。形状は不整形を呈する。土層軸で長さ 6.13 m、深さは現状で 1.6 mを測る。21 層・22 層以下では地山の層を検出し、12 層は 21 層を切っていることから、21 層・22 層は木が生えていた時の堆積層であり、5層～20 層が倒木に伴い生じた堆積層と考えられる。倒木に伴い生じた堆積層は、中心部を中心に5層～7層・13 層・14 層において1cm～4cmのブロックが混じる非常に固い層を検出し、これらの層の下に位置する9層～11 層・15 層～19 層においてはシルト質の埋土を検出した。これらのシルト質の埋土の下は 20 層で検出した砂層となり、この層より水が湧きだした。水が湧きだした層以降も遺構の堆積が想定されたが、平坦部において現地表面より 200 cmの地点に達していることから、安全性を考慮し掘り下げを止めた。また、倒木痕より北側に約 1.7 m木の根が延びている。21 層・22 層を切り、倒木に伴う堆積層と同様の層位で埋土が堆積しているが、SK2を崩す危険性があったので、掘り下げを途中で止めた。土層の堆積状況により、木は南側に倒れたと考えられる。



- SD2
- 1 淡褐色 (シルト、1mm以下の小石が少し混じる、やや粘質、しまりあり)
 - 2 褐色 (シルト、1mm以下の小石が少し混じる、やや粘質、しまりあり)
 - 3 茶褐色 (シルト、1mm以下の小石が若干混じる、やや粘質、しまりあり)
 - 4 暗褐色 (黒褐色のブロック混じる、砂粒が若干混じる、粘質、しまりあり)
 - 5 暗灰褐色 (橙色のブロック混じる、砂粒が若干混じる、粘質、しまりあり)
 - 6 灰褐色 (砂粒が若干混じる、粘質、しまりあり、遺物含む)

- SD4
- 1 淡灰褐色 (バサバサしている、砂粒混じる、[SD4の堆積層])
 - 2 黒褐色 (バサバサしている、砂粒混じる、[倒木痕の層])
 - 3 明茶褐色 (バサバサしている、砂粒混じる1cm×4cmの黄褐色のブロック混じる、[倒木痕の層])
 - 4 橙色 (砂質・砂粒混じる、しまりあり、[地山])



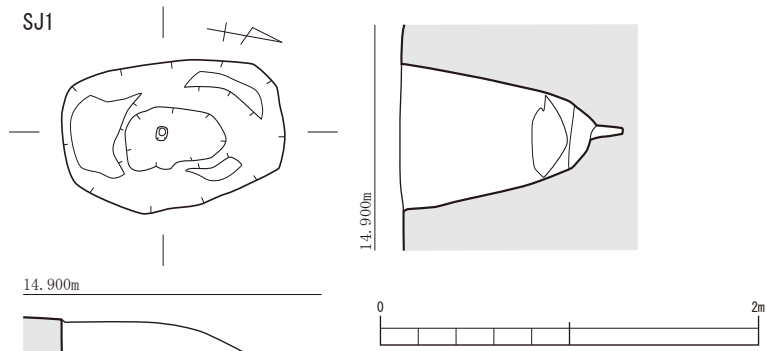
- SD3 A-A'
- 1 明灰褐色 (シルト、バサバサしている、小石含む、しまりあり)
 - 2 灰褐色 (シルト、バサバサしている、砂粒含む、しまりあり)
 - 3 黄褐色 (シルト、1cm×2cm位の灰褐色のブロックが混じる、小石あり、しまりあり)
 - 4 黒褐色 (シルト、しまりあり)

- SD3 B-B'
- 1 明灰褐色 (シルト、バサバサしている、小石含む、しまりあり)
 - 2 灰褐色 (1cm×2cm位の黄褐色のブロックが混じる)
 - 3 灰褐色 (シルト、バサバサしている、砂粒含む、しまりあり)
 - 4 黄褐色 (シルト、1cm×2cm位の灰褐色のブロックが混じる、小石あり、しまりあり)

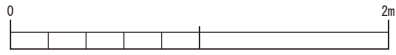
- SD3 C-C'
- 1 灰褐色 (シルト、バサバサしている、砂粒含む、しまりあり)
 - 2 明茶褐色 (バサバサしている、砂粒混じる)



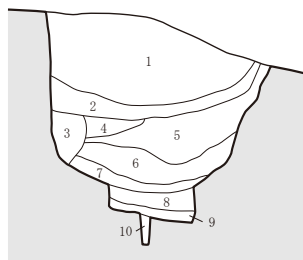
第8図 SD1・SD2・SD3・SD4実測図 (S = 1 / 40)



14.900m



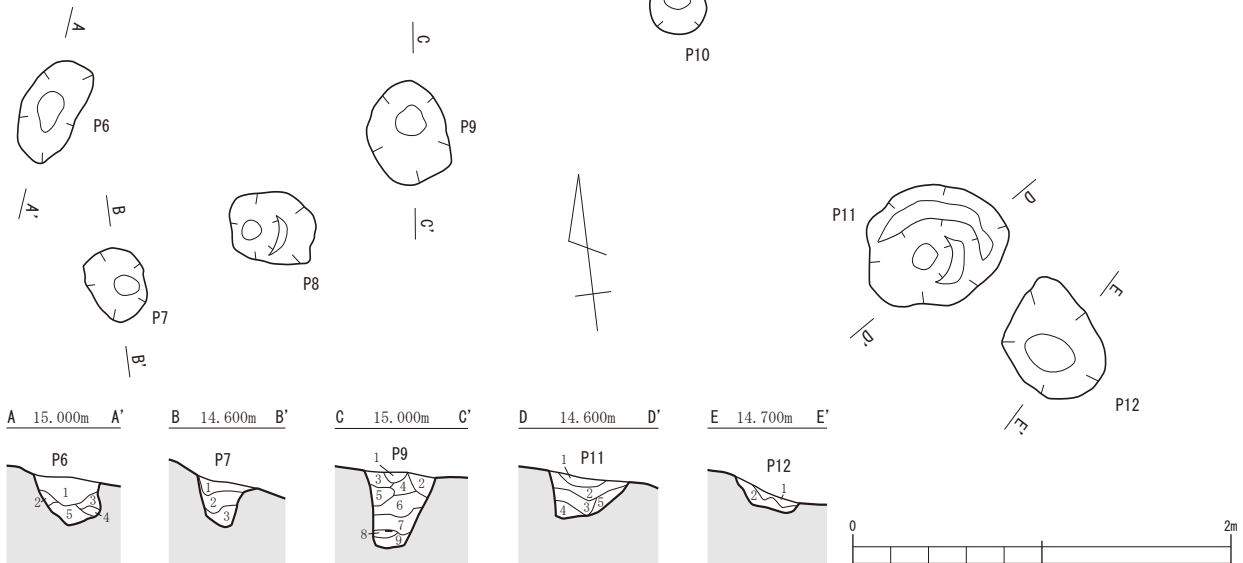
14.900m



SJ1

- 1 黒褐色 (しまっている、やや粘質、細かい砂粒混じる、シルト)
- 2 暗灰褐色 (しまっている、やや粘質、細かい砂粒混じる、シルト)
- 3 淡灰褐色と灰褐色の混在 (しまっている、やや粘質、細かい砂粒混じる、シルト)
- 4 灰褐色 (しまっている、やや粘質、細かい砂粒混じる、シルト)
- 5 褐色 (しまっている、やや粘質、細かい砂粒混じる、シルト)
- 6 濃灰褐色 (ややバサバサしているがやや粘質、細かい砂粒混じる、シルト)
- 7 暗灰色 (ややバサバサしているがやや粘質、細かい砂粒混じる、シルト)
- 8 茶褐色 (粘土、緻密、やや砂粒混じる、[攪乱部分])
- 9 赤茶色 (粘土、しまりあり、緻密、8ほど粘質ではない、[攪乱部分])
- 10 灰褐色 (シルト、ややバサバサしている、1mm台の砂粒が混じる)

斜面ピット群



A 15.000m A'

B 14.600m B'

C 15.000m C'

D 14.600m D'

E 14.700m E'

斜面ピット群

P6

- 1 暗灰褐色 (やや粘質、しまりあり、シルト)
- 2 暗褐色 (やや粘質、しまりあり、シルト)
- 3 褐色 (やや粘質、しまりあり、シルト)
- 4 淡灰褐色 (やや粘質、しまりあり、シルト)
- 5 灰褐色 (バサバサしている、しまりあり、シルト)

P7

- 1 黒褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり)
- 2 灰褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり)
- 3 褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり)

P9

- 1 淡灰褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり、細砂混じる、1cm×1.5cmの黄褐色のブロックが混じる)
- 2 灰褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり、細砂混じる)
- 3 2に同じ
- 4 茶褐色 (2cm×1cmの黄褐色のブロックが混じる、シルト、やや粘質、しまりあり)
- 5 灰褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり、細砂混じる、0.5cm×1.5cmの褐色のブロックが混じる)
- 6 暗灰褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり、細砂混じる)
- 7 黒褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり、細砂混じる)
- 8 褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり、細砂混じる、遺物含む)
- 9 黒褐色 (シルト、やや粘質、しまりあり、細砂混じる)

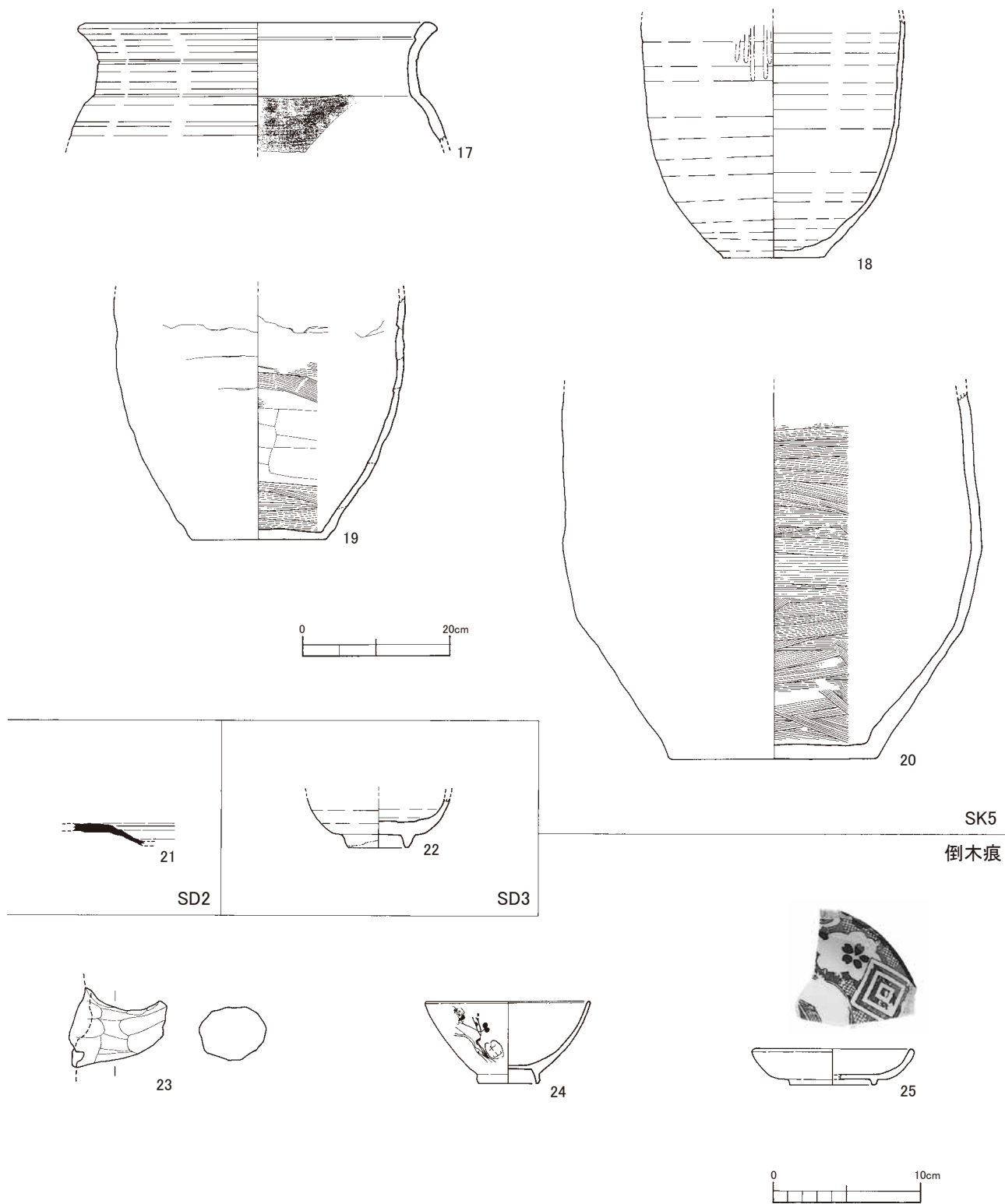
P11

- 1 淡灰褐色 (細砂含む、やや粘質、しまっている)
- 2 灰褐色 (細砂含む、やや粘質、しまっている)
- 3 淡灰褐色 (細砂含む、やや粘質、しまっている)
- 4 褐色 (細砂含む、やや粘質、しまっている)
- 5 黄褐色 (シルト、バサバサしている、[地山])

P12

- 1 灰褐色 (やや粘質、しまりあり、シルト)
- 2 淡灰褐色 (黄褐色[地山の土]が混じる、シルト、バサバサしている)

第9図 SJ1・斜面ピット群実測図 (S=1 / 40)



第10図 SK5・SD2・SD3・倒木痕出土遺物実測図 (17～20 : S=1/8、21～25 : S=1/4)

遺物は土師器・須恵器・磁器の小片が出土しており、以下3点のみ図化することができた。

出土遺物（第10図、図版6）

23は土師器の甗か甕の把手である。把手の上側は強い指ナデにより窪んでおり、断面はやや横に広がる台形を呈している。24・25は明治時代以降の磁器である。24は碗、25は皿である。畳付けに釉削りがなされており、銅版転写による染付が施されている。その他、土師器片や磁器片が出土している。

【Z】攪乱

調査区北側中央部の壁際において検出し、一部は調査区外に及ぶ。遺構は表土面から掘り込まれており、出土した遺物も近現代の磁器を中心に出土していることから、現代の攪乱と考えられる。

遺物は銅版転写による染付の磁器や陶器などが出土している。

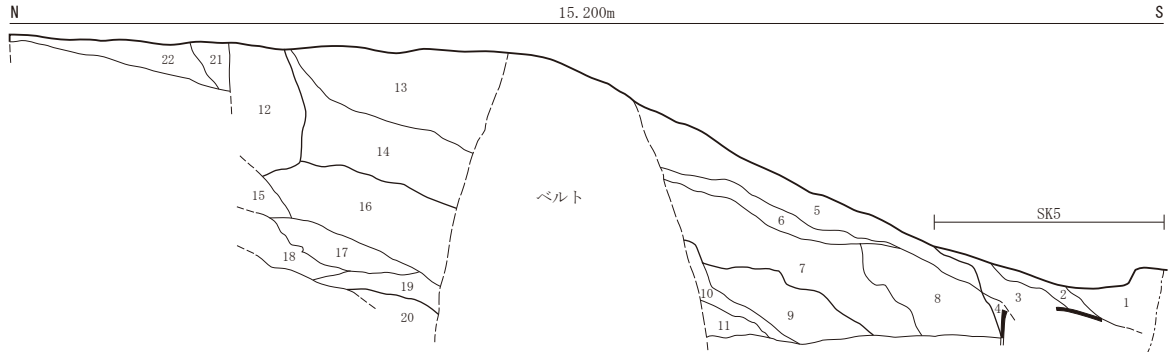
6. 調査区南側の地形変換点について（第12図）

今回の調査区には、南側におちる谷部が含まれている。この谷を挟んで南側に位置する井上小松山遺跡4においても同様な谷部が確認されていることから、この地域の旧地形を復元する機会であると考え、以下で下鶴区と井上区にまたがる地形変換点について若干の記述を行っておきたい。

調査前の干潟下鶴遺跡2の調査区は南に向かって台地が崖状に落ち込んだ地形であり、こうした様子は北壁東側の土層や西壁の土層で見られるように、表土掘削後の様子となんら変わりはない。また、干潟下鶴遺跡2の傾斜部分の遺構検出面は黄褐色粗砂の非常にもろい地盤であり、こうした地盤は、井上小松山遺跡4の傾斜部分でもみられた。このことから、井上小松山遺跡4の時期には、干潟下鶴遺跡2の丘陵においても同様な谷地形が形成されていたと考えられる。

小郡市において、このような開析谷が入り組む地形は、弥生時代前期から湧水を利用した水田として使用される例が多い。残念ながら、今回の調査を含め、いままでこの地域において水田遺構を検出するにはいたっていない。しかし、弥生時代以降、下鶴区と井上区には開析谷が入り組む地形が存在していたことを確認できたことは、当時の地形を知るうえで大きな成果である。

倒木痕



SK5

- 1 暗灰褐色 (2cm×1cmの黄褐色のブロック混じる、しまりあり、1mm以下の細砂粒を若干含む、シルト)
- 2 暗灰褐色 (1cm×0.5cmの黄褐色のブロック混じる、しまりあり、1mm以下の細砂粒を少し含む)
- 3 淡灰褐色 (砂層、非常にバサバサしている、1mm台の砂粒を多く含む)
- 4 灰褐色 (粘質、しまりあり、1mm以下の砂粒をわずかに含む)

倒木痕

- 5 明茶褐色 (1cm×2cmの灰白色[黄褐色も若干混じる]のブロックを非常に多く含む、しまりあり、1mm台の砂粒を多く含む)
- 6 茶褐色 (1cm×0.5cmの灰白色[黄褐色も若干混じる]のブロックを非常に多く含む、しまりあり)
- 7 橙色 (1cm×1cmの灰白色が混じる、黄褐色のブロックが混じる、しまりあり、バサバサしている)
- 8 灰褐色 (黒褐色・灰白色・黄褐色の6より小さいブロックが混じる、しまりあり、やや粘質、1mm台の砂粒を多く含む)
- 9 灰白色+灰褐色 (黄褐色のブロックが混じる、粘質、しまりあり、ややバサバサしている、0.5mm以下の細砂を含む)
- 10 灰褐色 (灰白色・黄褐色のブロックが混じる、粘質、しまりあり、0.5mm以下の細砂を含む)
- 11 灰白色 (黄褐色・灰褐色のブロックが混じる、粘質、しまりあり、0.5mm以下の細砂を含む)
- 12 茶褐色 (シルト、ややバサバサしている、しまりあり、1mm以下の細砂粒を多く含む)
- 13 淡褐色 (2cm×4cm以下の黄褐色のブロックが混じる、しまりあり、固い、1mm～3mm台の砂粒を多く含む)
- 14 明茶褐色 (3cm×8cm以下の灰白色・黄褐色のブロックが混じる、しまりあり、固い、1mm～3mm台の砂粒を多く含む)
- 15 灰褐色 (シルト、固い、しまりあり、1mm台の砂粒を多く含む)
- 16 淡褐色 (1cm×1cm以下の黄褐色のブロックが少し混じる、しまりあり、固い、ややバサバサしている、1mm台の砂粒を少し含む)
- 17 明灰褐色 (シルト、ややバサバサしている、1cm×1cmの黄褐色のブロックが若干混じる、しまりあり、1mm以下の細砂粒を多く含む)
- 18 明灰褐色 (シルト、やや粘質だがバサバサしている、しまりあり、1mm以下の細砂粒を多く含む)
- 19 淡褐色 (2cm×4cmの灰白色のブロックが混じる、しまりあり、やや粘質だがバサバサしている)
- 20 灰褐色 (砂質、非常にバサバサしている、1mm以下の細砂粒を多く含む)
- 21 淡褐色 (しまりあり、緻密、ややバサバサしている、シルト、1mm以下の細砂粒を少し含む)
- 22 明茶褐色 (しまりあり、緻密、ややバサバサしている、シルト、1mm台の砂粒を少し含む)

※1～3の下には4が堆積している (粘質が強くこの層より土器が出土している)

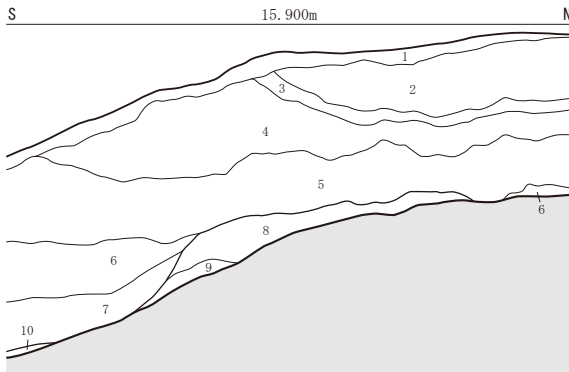
7～11の下は11が2cm程堆積した後、灰白色の砂質の層となる (1cm×1cmの黄褐色のブロックが混じる)

20の下は灰白色の砂質の層 (1cm×1cmの黄褐色のブロックが混じる、非常にサラサラしている)

22の下は黄褐色 (地山)

第 11 図 倒木痕土層実測図 (S= 1 / 40)

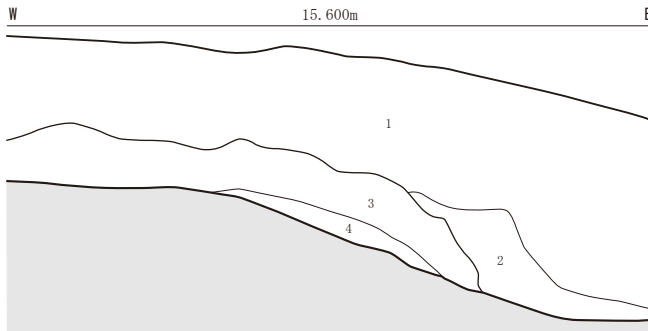
調査区西壁面



西壁

- 1 淡灰褐色 (砂質、バサバサしている、しまりなし)
- 2 明褐色 (シルト、しまりあり、やや粘質、1mm台の小石が少し混じる)
- 3 淡褐色 (シルト、しまりあり、緻密、乾燥すると非常にしまっている、1mm台の小石が少し混じる)
- 4 明褐色 (シルト、しまりあり、やや粘質、1mm台の小石が少し混じる、乾燥すると土が非常に硬い)
- 5 褐色 (シルト、しまりあり、やや粘質、1mm台の小石が少し混じる)
- 6 褐色 (シルト、しまりあり、やや粘質、1mm台の小石が少し混じる、5と似た土だが5より非常にしまりあり、固い)
- 7 明褐色 (黄褐色のブロックが若干混じる、しまりあり、やや粘質、1mm台の小石が極わずかに混じる)
- 8 橙色に褐色が混じる (シルト、しまりあり、やや粘質、1mm台の小石が極わずかに混じる、[丘陵上の遺構検出面の土])
- 9 黄褐色 (砂質、バサバサしている、1mm台の小石が少し混じる、[斜面の地山])
- 10 暗褐色 (砂質、バサバサしている、1mm以下の砂粒が極わずかに混じる)

調査区北壁面(東側)



北壁(東側)

- 1 茶褐色 (シルト、しまりあり、ややバサバサしている、[造成土])
- 2 暗茶褐色 (シルト、しまりあり、ややバサバサして、[造成土])
- 3 黒褐色 (シルト、しまりあり、1に比べ緻密)
- 4 暗褐色 (シルト、しまりあり、やや粘質)

第 12 図 調査区西壁面・調査区北壁面(東側) 土層実測図 (S= 1 / 40)

第5章 干潟下鶴遺跡2 出土人骨について

舟橋京子*・李ハヤン**・田中良之***

*九州大学総合研究博物館、**九州大学大学院比較社会文化学府、

***九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

小郡市教育委員会によって行われた福岡県小郡市干潟下鶴遺跡2から人骨が出土した。そこで、同教育委員会から九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、舟橋・李が現地における発掘・観察・取り上げを行った。その後人骨は九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座へ搬送され、同講座において、整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在同講座に保管されている。

2. 人骨出土状態

人骨は隅丸方形の墓壇の中央部付近から東側にかけて4ヶ所から出土している。墓壇中央付近では、床面直上から人骨が出土しており、東に行くに従って人骨の出土レベルは高くなり、最も東側から出土した人骨は床面から20 cmの高さから出土している。土層観察においても本墓壇が攪乱を受けた可能性が指摘されており、出土人骨には攪乱により位置が動いているものが含まれていると考えられる。

このような状態であるため詳細は不明であるが、墓壇の規模と人骨の分布状態から見ると、伸展葬であったとは考えがたく、仰臥もしくは側臥の屈葬であった可能性が高いと考えられる。

3. 人骨所見

【保存状態】

本人骨の保存状態は極めて不良で細片化しており、部位同定や観察は困難であった。

【年齢・性別】

年齢は推定可能な部位が遺存していないため不明である。性別も判定可能な部位が遺存していないため不明である。

4. まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は保存状態があまり良くなく、計測に耐えうる人骨はなく形質的比較を行える個体は得られなかった。

最後に本報告にあたり、小郡市教育委員会各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。

第6章 まとめ

1. 干潟下鶴遺跡2の遺構の時期とその変遷について

今回の調査で検出した遺構のうち時期が明確なのは、SB1、SK2、SK4、SD2、SD3である。掘立柱建物はその性格上時期の確定が困難であるが、SB1はSD2との遺構の切り合い関係より、少なくともSD2よりは古いといえる。SD2は出土遺物より7世紀後半と想定でき、また、SB1のP2からは古墳時代後期から終末にかけての土師器の甕の小片が出土していることから、SB1は少なくとも7世紀後半よりは古く古墳時代後期から終末を上限とする遺構であると考えられる。同時期の遺構としては、SK2が考えられる。これらのことから、古墳時代終末以降継続して集落が形成されていたと考えられる。近世になると、SK4、SD3がみられることから、少なくとも今回の調査区付近で人が生活していた可能性が想定できる。

出土遺物がない遺構でも、時期の明確な遺構との切り合い関係より、時期を推定することができる。倒木痕は、SK2を切りSD3、SD4に切られていることから、少なくとも古墳時代後期末より以降、近世より以前に生じたと考えられる。このことは、倒木痕より土師器の把手が出土していることから裏付けることはできるだろう。

以上より、干潟下鶴遺跡2では、古墳時代終末の集落と、近世以降の活動とが想定される。

2. 周辺地域における古墳時代後期から終末にかけての集落の広がりについて

干潟下鶴遺跡2の周辺では古墳時代後期から終末にかけて集落が広がっていることがこれまでの調査より確認されている。特に、古墳時代後期から終末にかけての様相は、公的性格を持つ7・8世紀の遺跡が確認されているこの地域の発展過程を考える上で必要不可欠な成果である。以下では干潟下鶴遺跡周辺の集落の広がりについてまとめることで、本調査の意義を明らかにしたい。

鎗巻川を挟んで北側と南側の両方の中位段丘上において、建物が確認されている。北側の丘陵では、干潟下鶴遺跡1・2において断片的ではあるが2間×2間の掘立柱建物が4棟確認されている。これらと同規模の掘立柱建物は、鎗巻川を挟んだ南側の丘陵でもみられる。井上南内原遺跡1・2・3では2間×2間、あるいは2間×3間程度の掘立柱建物が、井上北内原遺跡では竪穴住居8軒、2間×2間の総柱建物1棟が確認されている。特に、井上南内原遺跡1では大型掘立柱建物が1棟検出されるなど遺構密度が高いことから、南側の中位段丘上に当時の集落の中心地があったのではないかと考えられている。

また、鎗巻川を挟んだ両丘陵の間には谷部が形成されており、両丘陵ともに非常に見通しが効く位置関係にある。こうした谷部は、小郡市内では谷水田として利用されてきた。当時も、この谷水田を利用した集団が鎗巻川を挟んだ北側と南側の両方の中位段丘上に集落を築き、その一端が今回の調査を含め建物として確認されているのではないかと考えられる。ただし、水田の痕跡など見つかっていないため当時の集落の広がりなど推測の域を出ない。

下鶴地区はいまだ断片的な調査しか行われていないため、今後の調査成果の蓄積を期したい。

干潟下鶴遺跡2出土遺物観察表

<出土土器>

法量=口:口径、器:器高、底:底径

土色表記は、農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』2002年度版を用いた。

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整技法	残存率	備考
1	5	SR1 2層	磁、盃	口:(6.5) 底:3.3 器:4.3	外:明緑灰(7.5GY8/1) 内:灰白(2.5GY8/1)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:釉薬 内:釉薬	口~胴上 約1/4 底部1/1	外面胴部上半に文字 が転写されている
2	5	SR1 2層	磁、皿	口:(14.2) 器:2.5	内外:灰白(N8/)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	内外:釉薬	口~胴下 約1/4	口縁部が花卉状に湾 曲
3	5	SR1	磁、皿	口:(10.9) 底:(6.8) 器:1.75	外:灰白(10Y8/1) 内:灰白(N8/)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:釉薬 内:釉薬	口~底約 1/3	
4	5	SR1	磁、碗	口:(10.0) 底:3.8 器:5.0	内外:灰白(N8/)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:釉薬 内:釉薬	口~頸約 1/6	内面に輪状の釉ハギ
7	5	SK1	土、甕	口:(23.6) 器:3.95	外:橙(5YR6/6) 内:橙(7.5YR7/6)	φ4mm以下の砂粒をや や多く含む	良好	外:マメツ 内:ヘラ削り	口~胴上 約1/8	
8		SK1	須、 坏身	器:1.8	外:黄褐(2.5Y5/3) 内:灰黄(2.5Y6/2)	φ2mm以下の砂粒を少 し含む	良好	外:回転ヘラ削り、回転ヨコナ デ 内:回転ヨコナデ	胴~底約 1/4	
9	5	SK1	陶、碗	底:(7.4) 器:5.1	外:褐(10YR4/4) 内:にぶい黄褐 (10YR5/4)	φ1mm以下の砂粒を少 し含む	良好	外:釉薬 内:回転ナデ	胴下~底 約1/4	
10		SK2	土、甕	器:4.2	外:明赤褐(5YR5/6) 内:にぶい黄橙 (10YR6/4)	φ2mm以下の砂粒を少 し含む	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラ削り	口~胴上 小片	
11	5	SK4	土、鍋	器:6.8	外:にぶい黄橙 (10YR6/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	φ2mm以下の砂粒を少 し含む	良	内外:ハケメ	口~胴小 片	
12	5	SK4	土、鍋	口:(34.2) 器:3.3	外:黒(N2/) 内:橙(7.5YR6/6)	φ3mm以下の砂粒を少 し含む	良好	外:ナデ 内:ヨコナデ、ヨコ方向ハケメ	口~胴約 1/6	外面は全面にスス付着
13	5	SK4	土、鍋	口:(41.0) 器:2.5	外:にぶい褐 (7.5YR5/3) 内:にぶい橙 (7.5YR6/4)	φ1.5mm以下の砂粒をや や多く含む	良好	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ハケメ後ナデ消し	口~胴約 1/8	外面にスス付着
14		SK4	瓦、鍋	口:(22.2) 器:4.5	外:黒(7.5YR2/1) 内:褐灰(10YR5/1)	φ1mm以下の砂粒をや や多く含む	良	外:ヨコナデ、ヘラ削り 内:ナデ	口~胴約 1/8	外面にスス付着
15	6	SK4	陶、碗	底:(8.0) 器:7.85	外:黒(7.5Y2/1) 内:灰褐(7.5YR5/2)	φ1mm以下の砂粒を少 し含む	良好	外:回転ヨコナデ後釉薬 内:回転ナデ	胴~底約 1/2	畳付けに砂が付着
16	6	SK4	染、皿	底:(7.4) 器:2.0	外:明緑灰(7.5GY8/1) 内:灰白(2.5GY8/1)	φ1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	良好	外:釉薬 内:釉薬、染付あり	胴~底約 1/5	内面に輪状の釉ハギ
17		SK5	陶、甕	口:(46.6) 器:16.4	外:黒(10YR1.7/1) 内:褐灰(10YR4/1)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:釉薬 内:釉薬、タタキ	口~底約 4/5	
18	6	SK5	陶、甕	底:13.4 器:32.1	外:灰オリーブ(5Y4/2) 内:赤灰(2.5YR4/1)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:釉薬、回転指ナデ 内:回転指ナデ	胴~底約 1/1	底部は回転ヘラ切りで 切り離し
19	6	SK5	土、甕	底:18.2 器:32.9	外:橙(5YR6/6) 内:にぶい黄橙 (10YR7/4)	φ1mm以下の砂粒をや や多く含む	良好	外:マメツ 内:ハケメ	胴~底約 1/1	
20	6	SK5	土、甕	底:27.4 器:49.7	外:にぶい橙 (7.5YR7/4) 内:灰黄(2.5Y7/2)	φ2mm以下の砂粒を少 し含む	良好	外:マメツ 内:ハケメ	胴下~底 約1/1	
21		SD2床面	須、 坏蓋	器:1.5	外:灰(N5/) 内:灰(7.5Y5/1)	φ1mm以下の砂粒を少 し含む	良好	外:回転ヘラ削り、ヨコナデ 内:ヨコナデ	体小片	
22	6	SD3	磁、碗	底:(4.0) 器:3.3	外:暗褐(7.5YR3/3) 内:黄灰(2.5Y6/1)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:回転ヨコナデ、釉薬 内:釉薬	胴~底約 1/2	内面に輪状の釉ハギ
23	6	倒木痕	土、 把手		外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:にぶい黄橙 (10YR7/4)	φ2mm以下の砂粒をや や多く含む	良好	外:指押さえ、指ナデ	把手1/1	
24		倒木痕	磁、碗	口:11.0 底:4.1 器:5.55	内外:灰白(N8/)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:釉薬 内:釉薬	口~底約 1/3	畳付けは釉を削る
25	6	倒木痕	磁、皿	口:(11.0) 底:(5.8) 器:2.4	内外:灰白(N8/)	φ0.5mm以下の微砂を 少し含む	良好	外:釉薬 内:釉薬	口~底約 1/4	畳付けに砂が付着

<出土金属製品>

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	備考
5	5	SR1	貨幣	規:2.4cm×2.4cm 厚:0.1cm、重:2.4g	
6	5	SR1	貨幣	規:1.6cm×1.6cm 厚:0.3cm、重:0.9g	

圖 版

図版1



①調査区全景（真上から）



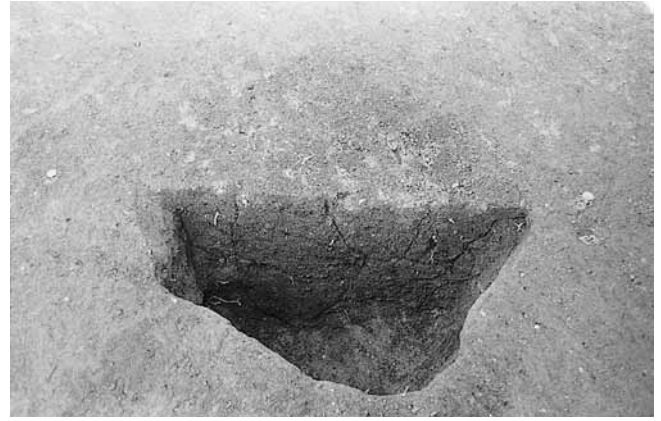
②調査区より花立山をのぞむ（南側から）



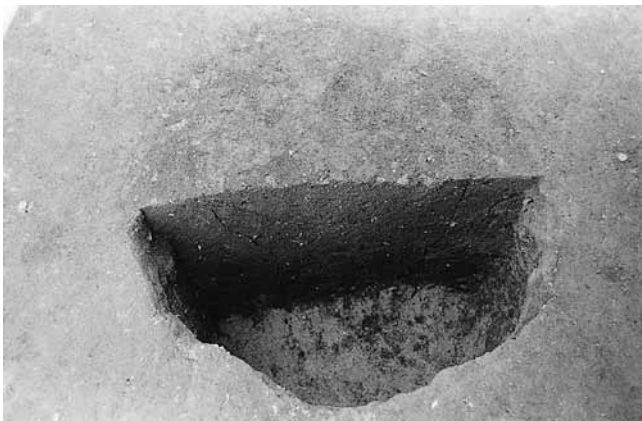
③SB1全景（真上から）



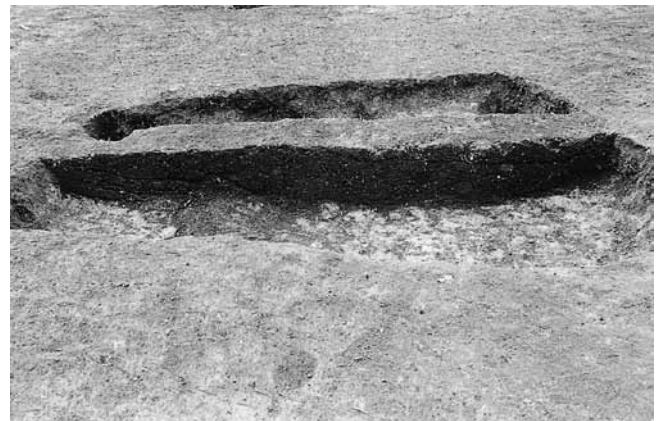
①SB1のP1土層断面 (南側から)



⑤SB1のP5土層断面 (南側から)



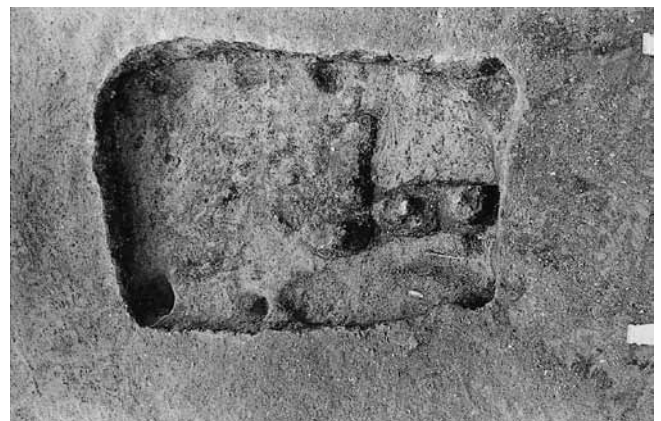
②SB1のP2土層断面 (南側から)



⑥SR1土層断面 (北側から)



③SB1のP3土層断面 (南側から)



⑦SR1人骨出土状況 (南側から)



④SB1のP4土層断面 (南側から)



⑧SR1人骨出土状況UP (東側から)

図版3



①SK1土層断面（南側から）



⑤SD1土層断面（西側から）



②SK2土層断面（南側から）



③SK3土層断面（東側から）



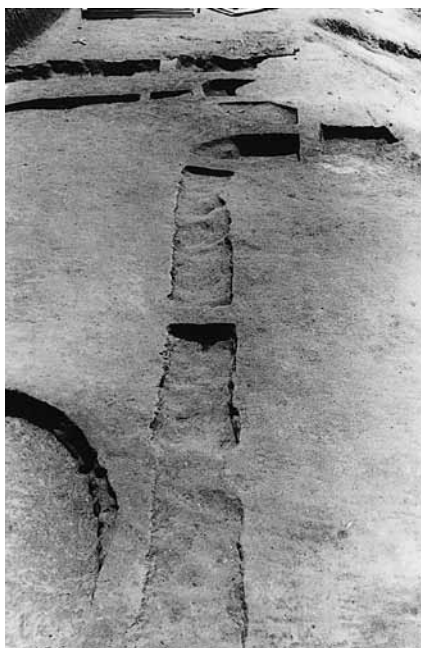
④SK4土層断面（東側から）



⑥SD1完掘全景（西側から）



⑦SD3西側土層断面（西側から）



①SD3完掘全景（西側から）



④SJ1土層断面（西側から）



⑤SJ1ピット完掘全景（西側から）



②SD4北側土層断面（北側から）



⑥倒木痕土層断面北側（西側から）

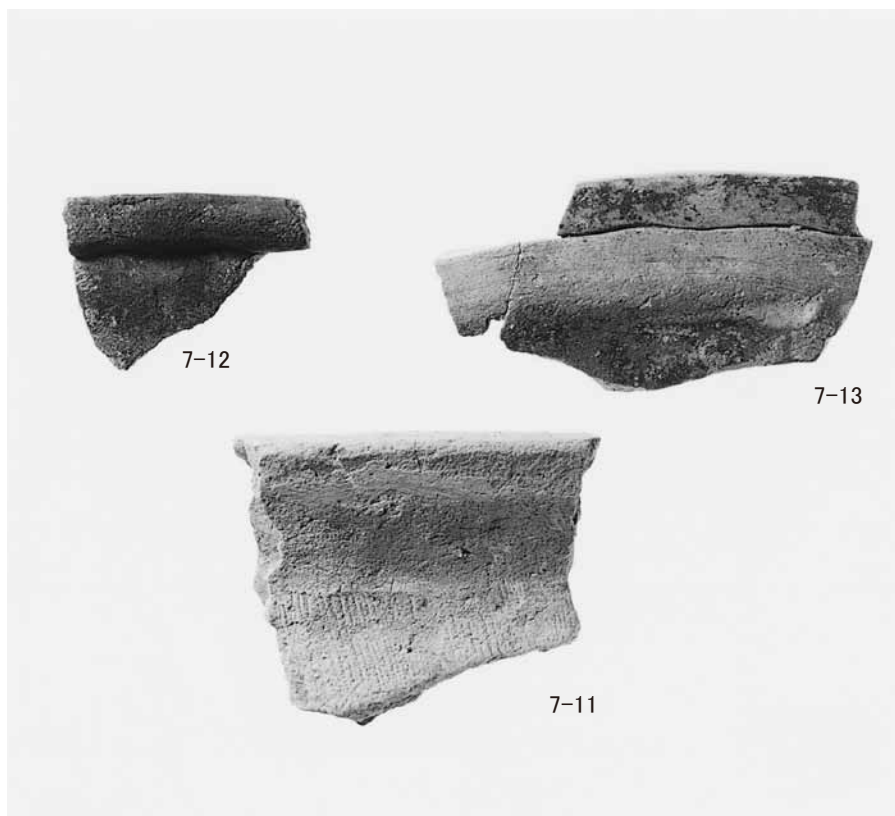
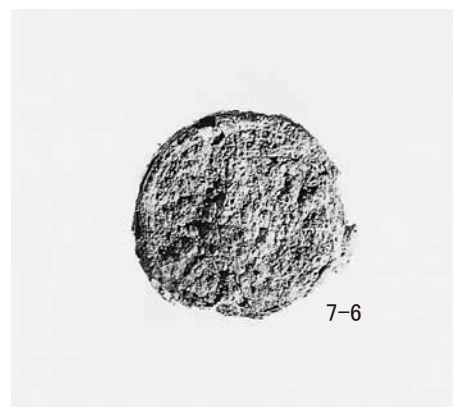
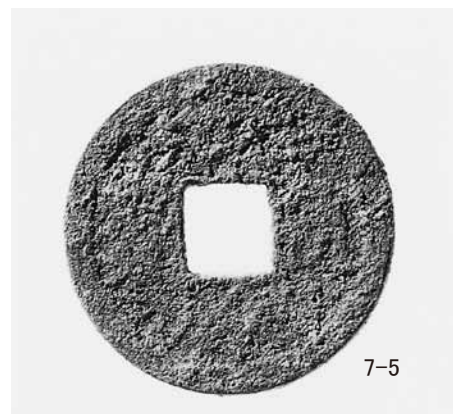
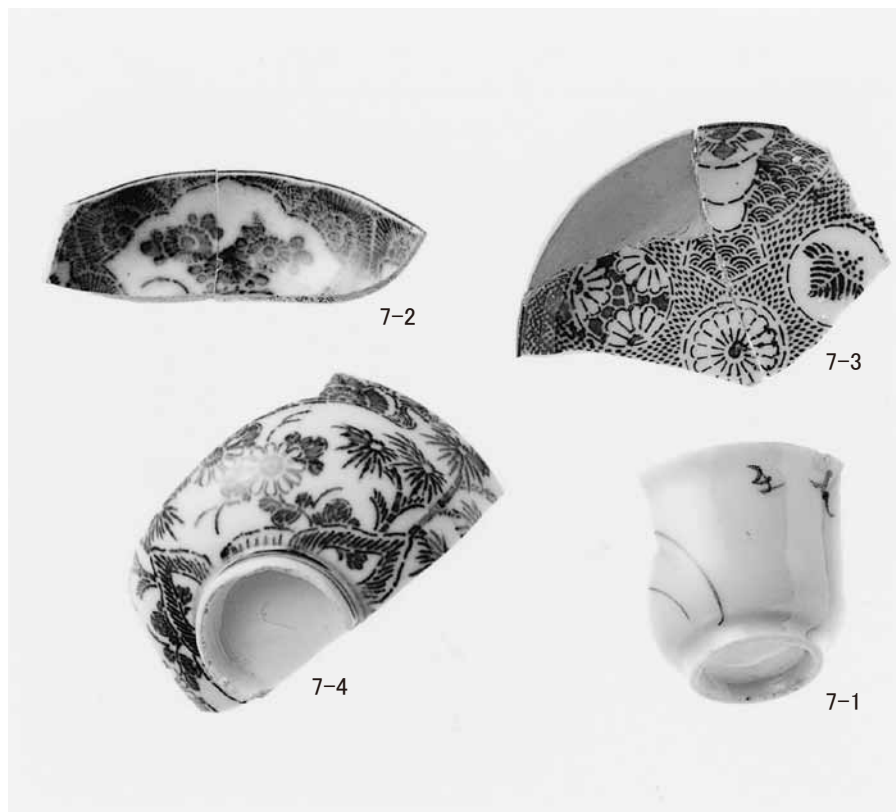


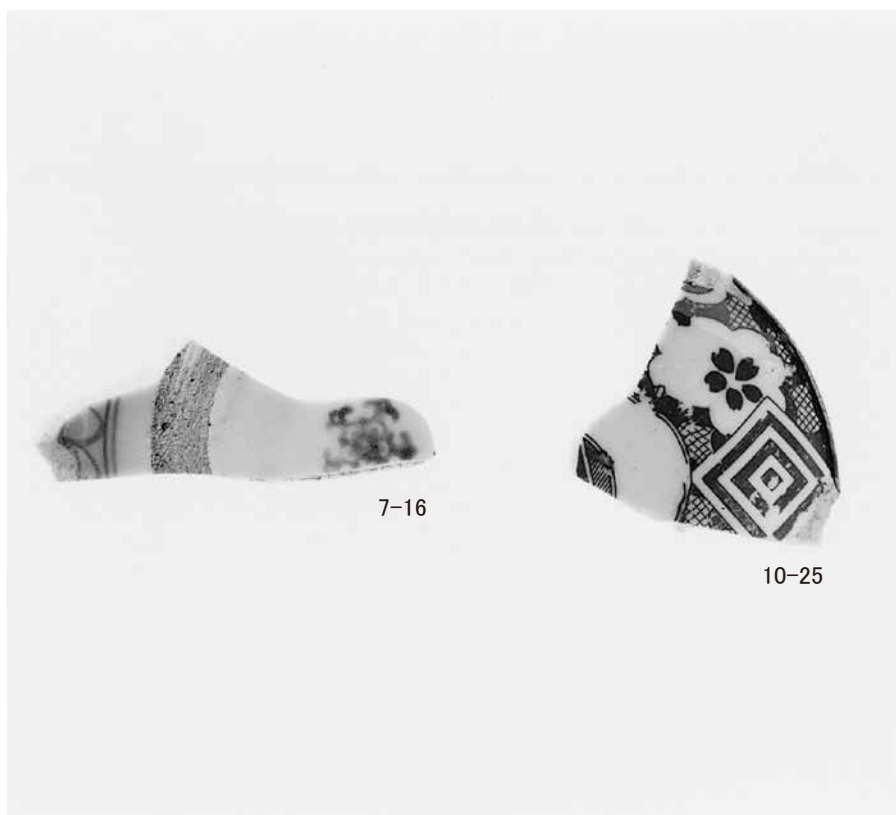
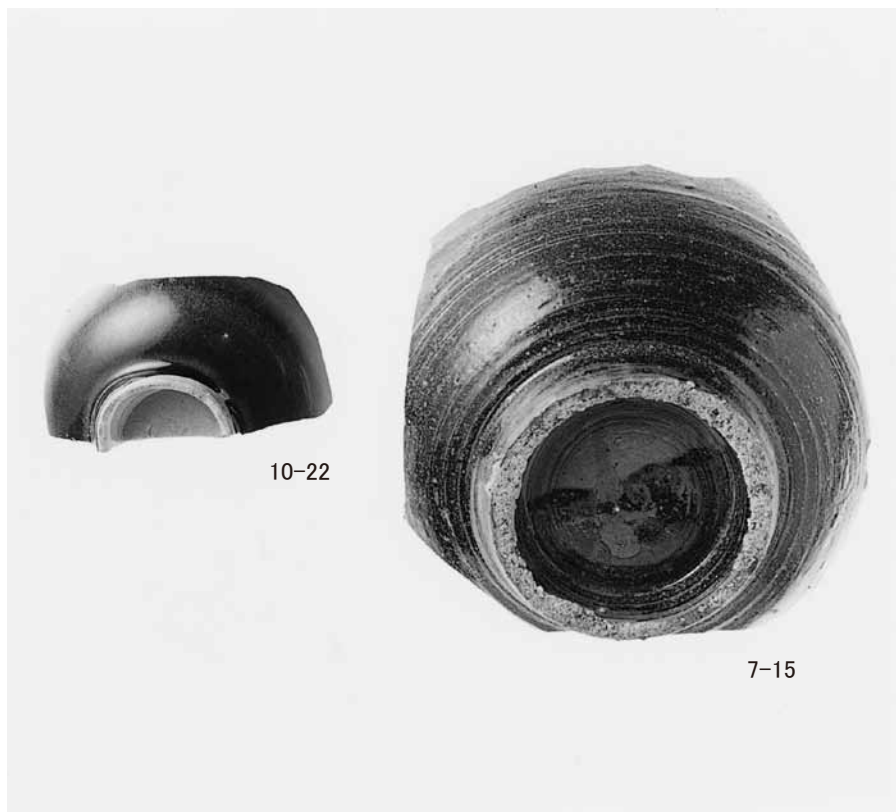
③SD4完掘全景（南側から）



⑦倒木痕土層断面南側（西側から）

图版5





報告書抄録								
ふりがな	ひかたしもづるいせき2							
書名	干潟下鶴遺跡2							
副書名	福岡県小郡市干潟所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第254集							
編著者名	西江 幸子							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在位置	〒 838-0198 福岡県小郡市小郡 255-1 Tel 0942-72-2111							
発行年月日	平成 23 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ひかたしもづる 干潟下鶴 いせき 遺跡2	ふくおかけん 福岡県 おごおりし 小郡市 ひかた 干潟 あざしもづる 字下鶴	40216		33° 24' 30"	131° 25' 08"	2010.7.14) 2010.8.27	280 m ²	市道大保・今隈 10号線 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
干潟下鶴 遺跡2	集落	古墳時代 奈良時代 近世 近代		掘立柱建物 土壇墓 土壇 溝 落とし穴状遺構 ピット群		土師器 須恵器 陶磁器 貨幣		
要約	古墳時代後期から終末にかけての掘立柱建物1棟が確認された。これは、西側に隣接する干潟下鶴遺跡1と同時期のものであることから、同一の集落を形成していたものと考えられる。また、調査区において南側に傾斜する段丘崖を確認した。これにより、鎗巻川を挟んで南側・北側においてみられる小規模な開析谷が入り組む地形が、調査区南側に広がっていたことを確認することができた。							

干潟下鶴遺跡 2
 小郡市文化財調査報告書
 第 254 集
 平成 23 年 3 月 31 日
 発行 小郡市教育委員会
 福岡県小郡市小郡 255-1
 出版 アーネスト
 福岡県小郡市小郡 845-3